
そして少年は引き金を引く。

七海洋平

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

そして少年は引き金を引く。

【Nコード】

N3616C

【作者名】

七海洋平

【あらすじ】

特殊部隊の少年。仲間と共に戦い成長する。撃つことを躊躇いながら。泣きながら、苦しみながら、殺す自分を憎みながら、敵と戦う。そして少年は引き金を引く。

第1話 狙撃手

ざあああああ……

「残り12……」

激しい雨が降る日の半壊した3階建ての建物の中で赤い髪をした男が呟いた。

年齢は10代の前半に見える、

背も小さく男と言うよりは少年と言った方がしっくりくる。

近くには20代の青年もいる。

少年と青年は観測手もつけずに軍用の遠距離狙撃用ライフルのスコップを目につけてジツと眼下に広がる廃墟を見据えていた、

回りにはキラキラとひかる真鍮製の空薬莖が散らばっていた。

少年はその幼さの残る顔におよそにつかわしくない悲壮感に満ちた表情をしている。

テロリストとの比較的大規模な戦いが終了し2日、残党狩りにかりだされた人間は、自軍にこれ以上の被害が出ない用にと特殊部隊が選ばれた。

もし外した場合、弾丸の着弾点で軌道がバレる。着弾点は狙撃手の居場所を敵に教えてしまう。そのため狙撃に秀でた者が狙撃手をやらないと殺される可能性が非常に高いからと言うのがその理由だ。それにくわえ冷静な判断が出来ない者が狙撃を行えば外した後に音を気にせずに撃ち、標的を消してもその仲間に殺られる事になる。

第2話 涙。

「残り8…」

少年は雷の音や標的が出した発砲音に

自分の発砲音が紛れる用に細心の注意を払って確実に敵の頭に弾丸を撃ち込んでいく。

少年の頬を涙が伝う。

「ごめんなさい……」タン！カチャン。『ごめんなさい、タン！カチャン。』許して『タン！カチャン』

少年が泣きながら引き金を引き、

ライフルが『タン！』と乾いた軽い音を出す度に、螺旋の軌道を描いて音速を越える銃弾が発射され、遠くでピストルを構えて辺りを警戒しながら進んでいた敵兵士の頭を撃ち抜き地面を紅く染めた。

他の音に紛れる為に仲間の死に気付く者は少ない、そして、大抵は気付く前に地面を紅く染める。

少年には、

銃身に弾を送り込むポンプの軽さも、

引き金の軽さも、

全てが命の重さを笑っているように感じられた。

少年は散らばった空薬莖を腰の麻袋に入れると、ポイントを移動しようと立ち上がった。

「ンッんゝ、ンゝ、フフン 残り8発」

銀髪の青年が戦場にはどう考えても合わない鼻唄を歌いながら戦いに生き残った敵の兵士を撃ち抜いていく。

「んっ、バイバイ『タタタン!!』来世ではきつと幸せになつてね、さて、残り5人」

青年の銃には弾丸を送り込む為のポンプが無かった、一瞬で3人の命を刈り取ったその銃は青年の腕に抱かれ、黒く、鈍く輝いていた。

「ふっ、ツカレタ…おっ？アイツも移動かぁ」

青年は少年を見て微笑んで少年が腰の麻袋に空薬莢を入れ終わるのを待った。

第3話 移動中

「よっ」

青年が空薬莢を麻袋に入れ終えて振り向いた少年に声をかけた。

「…アルさん、もう終わったんですか？」

アルと呼ばれた青年は首を左右に振って答える。

「んーにや、ポイント変えようと思ったんよ。ハル君もだろ？」

少年、ハルは頷く。そのすぐ後、

アルが何かに反応してスコープを覗き、

少し驚いた顔をしてその場で銃を構えて、

そして撃った。

苦い顔でハルを見て、言った。

「まだ生きてたぞ、相手には出来る限り苦痛を与えるな。」

アルは鼻唄を歌っている時の顔でも、

ハルに話しかけた時の優しい顔でもなく、

どこか悲しそうに、ハッキリと言った。

ハルはアルの蒼と赤の双眼に見つめられ、

泣きそうな顔になった。

アルはハッとして

「おっと、ごめんさ。ちょっと俺もピリピリしてたから。」と誤魔化した。

苦笑いした青年は

先天性白皮症と後天性の虹彩異色症を併発している、

そのため、日本人だが真っ白な肌に銀髪、右目に蒼い瞳と左目に赤い瞳を持っている。

軍の中でもかなり珍しい存在だ。

そして虹彩異色症が発症した時に、

原因はわからないが耳が異常な程敏感になったらしい。
因みに右目は虹彩異色症になった時に色盲になっている。

「さつきは音を気にかけることが出来なかった。アイツ無線機を握ってたぞ。早く動こう。」

少年は目を伏せて済まなさそうに

「はい。」

とだけ言って黙り込んでしまった。

次のポイントまでの道のりが随分遠く感じる。

「ハルって本名なん？」

沈黙を破るいきなりの質問にハルは少し驚いた後に、

「違います。……アルさんは本名……じゃありませんよね？」

違う。とだけ言って本名を教えなかった所を見ると言いたくないらしい。

「おうよ、アルなんて名前の日本人なんているわけないつしよ。

アルってのは先天性白皮症から来てんの。」

アルはそんな事を気にせずにハルの質問に答えた。

ハルはアルに顔を向け不思議そうに

首を傾げる。

「どういう意

「アルビノ、白皮症の学名だよ。

それで、アル。アルビーナ＝オッド。

オッドってのは虹彩異色症、

つまりオッドアイから来てんの。ちなみにコレ、逃しちゃった外国の敵サンにつけられた有難くない名前。ま、戦場で本名使うよりはいいから使ってる。じゃさ、何で髪赤いの？もしかして染めた？」
ハルは少し戸惑った後

「血で……染まりました。元々は黒です。」

と言った。

「わりい」

「いえ」

また会話が途切れ、2人は静かに歩いた。

第4話 連絡

気まずい雰囲気で次の狙撃ポイントまで歩いていると……
ピリピリピリ。

2人の通信機極小さな音で同時になった。

反射的に肩の位置にあった通信機に手をかけ応答する。

『帰還を命じる！今すぐ戻ってこい、お前達を失う訳にはいかん！
！！北の門を出てなるべく離れる！！！！』

通信機から部隊長の

「おっちゃん」の声が響く。

「了解」

アルはすぐに反応し、ライフルを肩に担ぎ
ピストルを腰のホルスターから抜いた。

「ハル君、帰るよ。」

兄が弟に声をかけるように

極自然に呼んでポカンとしていたハルの手をとって走り出した。

「何があつたんですか！？」

「さ〜ね〜、けどおっちゃんがあんなに焦るからには結構ヤバいかなあ？とにかく逃げるよ、後ろ乗って！」

ビルの外には隠すようにバイクが置いてあつた。

マフラーには見慣れない装置がついている。

「なんですかそれ？」

「最新のサイレンサー、バイクで隠密行動が出来るくらい静かに走れるんだ。

速度は出ないけど、そーいやハル君はヘリからのリペリング降下班だから知らないんだろうね。」

アルはそーいうとピストルをバイクにむけマフラーについていた装置を器用に撃ちおとし、エンジンをかけた。

爆音が辺りに響き渡る。

「いいんですか!？」

後部座席にのったハルがエンジン音にまけない用に叫んだ。

「備品の破壊も音も緊急事態だから問題無いよ。いくぞ、」

アルは北門に向かって最大速度でバイクを走らせた。

第5話 脱出と帰還

街を出て30秒。バックミラーには爆発炎上して黒煙を盛大に噴き上げながら炎に包まれている街が写っていた。

「……敵さんは派手好きなのかな？どう思う？ハル君」

アルはそう軽口を叩いたが笑顔が微妙に引きつっていた。

「……本部に帰りましょう。アルさん、本部長に早くお礼を言わなきゃ。通信機、僕のもアルさんのも壊れてます」

「おッ、ホントだ。確かに今日の雨は酷かったけど、防水が甘いな、開発部に文句言わなきゃ。よっしゃ、じゃ、家に戻るか。とばすからしっかり捕まってるね。」

2人は雨の中真っ赤に燃えている街を後にして

「家」へとかえって行った。

「アアツツ……」

ついさっきまで居た街とは違ってかわって晴れわたる空の下、

小回りのきく、大排気量のバイクにしては小型のオフロード車に乗った2人が高速で走っている。

「何kmぐらいだっけ？」

運転手の青年、アルは後部座席に座る少年、ハルに主語の無い質問をした。

「本部から今回の任務地は約350kmです。出発から大体2時間たちましたから残り後150kmぐらいですね。」

ハルの答えにアルは渋い顔をする。

「そっか、まだ遠いね、迎えが無いのは知ってたけど……キツイなあ

……アル君、ちょっと休憩していい？ほら、あそこの木の陰でも。

「

アルが道端に生えていた大きな木を指差した。
顔は見えないが疲れた声で聞くアルにハルは

「ええ、了解です。」

と休憩することを快諾した。

「ありがと、じゃあ停めるよ。」

そう言うとスピードを緩め木陰に停まった。

停めたバイクの荷台に縛りつけた鞆を

ゴソゴソと探っているアルを立ったまま不思議そうに見ていたハルにアルは

「先座つてて。」

とだけ言っ て荷台の鞆を探り続けた。

第6話 休憩く大きな の木の下で

木陰に座ったハルは

「ふー。」と息を吐いて目を瞑った。

「コーヒー飲む？」

目を瞑っていたハルが

目を開けるといつの間にかコーヒーとコーヒーに入れる為の砂糖、クリープ、お茶菓子のクッキーがだされていた。

「……ドコにそんなもの持ってたんですか……？任務地に不要な物を持ってい」

そこまで言ってハルはいきなり言葉を切った。

その目の前には今まで見た事が無いような、

恐怖を感じる笑顔を自分に向けるアルがいた。

「不要な物って何かな？」

と言ったとき何も喋らないアルが持つステンレスのカップが目に見えてたわんでいた。

「す、すすすみません、頂きます……！！」

慌てて自分の前に置かれていたカップを掴んで

それが自分の命であるかのように握り締めた。

「うん。どうぞ、あ、クリープでも砂糖でもお好きにどうぞ。あとクッキーも！」

そう言ったアルの顔からは先程の恐ろしい笑顔が消え去り

心の底から笑っているような無邪気な笑顔を浮かべていた。

「ふー、幸せだなー。コーヒーはなんでこんなに美味しいんだろうね、ねえハル君？」

「そうですね、……どうしてでしょうか……。」

ひきつった笑顔で短く返事を返したハルは、
アルと親族の様な親しい会話をしていた事を
後悔したような顔で、

わざと他人行儀な口調で話題を替えようとアルに話しかけた。

「アルさん、同じ部隊の人間として、アナタの事を少し詳しく知りたいのですが宜しいでしょうか？」

第7話 過去

「あゝそうか、

ハル君はうちに入ってまだ3日だったわけ？

引越しか色々あるのに入ってすぐ任務なんてついて無いよねゝ、よし。じゃあプロフィール紹介しようかな！えゝ…身長は」

「あ、それは知ってます。

部隊長に貰ったプロフィールに書いていた事は覚えてます。

身長186cm 体重70kg 血液型はB型

先天性白皮症と虹彩異色症を併発、聴力が非常に優れていて優秀な狙撃手として活躍していると書いていました。」

アルはハルの記憶力の良さに驚いた顔をしてハルをジッと見ていた。その眼を正面から見返して

「僕はアナタが軍に入った理由が知りたいんです。

そして僕が入った理由を知って貰いたい。」

不安そうな、真剣な表情で、

ハルはハッキリと言った。

「うい、」

アルが場にそぐわない軽い返事をした。

「俺はちっちゃい頃おっちゃんに助けられたん、

だから今度はおっちゃんを助ける為だけに軍にいる。」

それだけ言ったアルは遠い目をしている。そして休憩を初めて5杯目のコーヒーを飲み干した後、

無言でハルが話始めるのを待った。
そのことに気付いたハルが話始める。

「…僕の育て親はテロリストだったんです。だけど僕はその行動に疑問を持っていました。」

ある日、あの人たちは不意に突入してきた軍の兵士に僕の目の前で撃ち殺されました。

その作戦の指揮をとっていたのが部隊長でした。

僕はあの時一緒に撃たれていてもおかしくなかった。

だけど部隊長は僕を引き取って育ててくれました。

そのお礼がしたくて、僕は反対する部隊長に頼みこんで狙撃の訓練を受け、部隊に入ったんです。

名前は陽菜、春に陽を浴びた菜の花のように、強く美しく育つように、らしいです。部隊長がつけてくれました。

だから僕は、悲しい思いをしてでも狙撃手を続けます。」

少し驚いた顔をしたアルを見て、ハルは泣きそうな顔になっていた。絆ができてしまう前に、自分が幼い頃、敵に育てられていた事を自ら話したが少年はアルに、
自分に対して良くてくれた人に、嫌われるのがやはり辛いのだろう。

そんな少年を見てアルは静かに笑った後にスッと右手を差し出し、言った。

「じゃあ、おっちゃんに恩があるどうし、仲良くしような！ほれ、握手握手。」

予想外の言葉に驚くハルの手を取って力強く握手を交した。

第8話 家に帰ろう。

アハハ、と嬉しそうに笑いながら握手した手を上下にブンブンとふるアルに状況をうまく理解出来ず、目を丸くしたハル。
端から見ればどこまでもシュールな光景だ。

「どうして…？」

ハルが呟く。

「ん？何が？」

本当に何がかが解らないアルが聞く。

「どうして僕を嫌わないんですか？」

僕は敵に育てられてたんですよ……

危険思想のテロリストに…もしかしたら敵討ちで部隊を内部から壊そうとしてるかもしれないんですよ？」

いつそのこと隠さずに嫌ってほしい。

そう思い震える声でハルが尋ねる。

「おっちゃんが言ってたよ、『陽菜は優しい子だ。』ってさ、

それに昔なんて知らないし、今君は仲間だ。

俺が君を、嫌う理由が何処にある？」

アル笑いながらはハルをビシッと指さして答え、

自分のカップに6杯目のコーヒーを、

空になっていたハルのカップにも2杯目を注いだ。

「さ、長話して疲れたっしょ、これ飲んで出発しよう。

通信機壊れてるから家に連絡してなかったし、早く戻らないと俺たちの葬式が始まっちゃうよ。」

「えっ！？そうなんで

「まあ冗談だけど。あ、あと任務地で話した時から言おう言おうと

思ってたけど、出来るだけ敬語は辞めてね。」

戦場が職場の人たちには笑えない冗談をとばし、相変わらずの笑顔でアルが言った。

「はい！」

アルの笑顔が移ったような嬉しそうな笑顔でハルが言った

「こら」

「あ、すみませ…や、違う。ごめんなさい。」

「ん…まあよし」

木陰からオフロードバイクが走り出した。

それに乗っていた2人は、戦場の悲しみを払い除けるような明るい笑顔をしていた。

第9話 帰宅

「やっと…やっと着いたよ。」

予備燃料多めに持つといて助かったよホント。

まさか途中で補給出来ないとは……たどり着けてよかった。」

アルはげっそりと疲れた笑顔をしている。

「大丈夫？」

「ヤバいかも。」

所属している特殊部隊「world protection mechanism」の本部の前で、

そんな会話を交わす2人。

本部の建物はそれほど大きくはなく民家が6つ連なったような物がある程度だが、

庭は模擬訓練をするためにかなりの広さがある。

部隊に所属する者は

「家」と呼んで慕っている。

いきなりドアがバン！！と開いた。

「アル！！アルじゃない！！と確かハル君！！遅いわよ！！心配したのよ！！？」

家から飛び出してこっちに走って来たのは精悍な顔立ちで、カーゴパンツにTシャツというラフな格好をした少女だった。

「おー！モモ。」

両手を広げてモモと呼ばれた少女を抱き上げたアル。

「心配かけてゴメツ！！？んなあ！！？」

「ミシィ……」

隣でその光景をポカンと見ていた

ハルには骨が軋む音が確かに聞こえた。

「ちよっ！待つ、ゴメン！！タンマ、話を！話を聞いて！話……」

アルがぐったりとして動かなくなった。

「……アルさん？」

返事が無い、ただの屍のようだ。

「ふー、とりあえず気がすんだ。さて、『ついでに2人目いっとくかあ』。」

気を失ったアルとは対照的なすがすがしい顔でモモはハルを見た。

ハルには少女が『ついでに2人目いっとくかあ』 そう言ったのが確かに聞こえた。

「ハル君、なんで帰るのが遅かったか教えて貰えるかしら？

3秒以内に！！！」

モモはハルに、コーヒーを『余計な物』扱いした時にアルがした笑顔と同じ顔をしていた。

「2……1……」

「ひっ……」

「0……タイムオーバーね…残念だね。本当に。」

モモに抱きすくめられたハルの体に少しずつ力が込められていく、

「うっ……」

短い悲鳴を上げて全身から力が抜けた。

2人を気絶させたモモは

「んっ！よし！おじさんのトコまで引っ張ってくかあ！」

満足気に伸びをした後、清々しい顔で2人の襟を掴み、

ズルズルと家の中まで引っ張っていった。

第10話 本部長室で

ズルズルズル……

家の中で2人の人間を引きずって歩くモモとすれ違った人は別段驚くわけでもなく、

「おっ、アルと新入りの子、戻って来たんだ。」と言ったり

「家族を絞め殺すなよ。」などと冗談を言ったりした。

2人を散々引きずって歩いたモモは「おっちゃん（WPM本部長）」と書かれたふざけた標札が吊り下げてある部屋にノックもせずに入った。

「お疲れ様。アル、陽菜。」

「…私は？」

「心配だったのはわかるけど、次からはもっと優しくね」

そう優しく言った初老の男性は読んでいた書類から顔をあげた。

「…はい。」

少女は有無を言わずアルとハルを絞めあげた少女と同一人物とは思えない程、素直に頷いた。

「まあ気絶した人から報告を聞くわけにもいかないし、2人を医務室に連れていってくれないか？」

「その前に聞きたいんだけどいい？」

「なんだい？」

「おじさんの部屋から怒鳴り声が聞こえたんだけど…なんで？」

渋い顔をしてから少女を見つめ、諦めたように首を振り

「……任務地だった街がまるまる爆発したんだ。テロリストの多い街だったから何年も前から少しずつ地下に埋めていたんだろう。比較的小型の物を、噂もたてない用に、慎重に。そして個人の避難用と称した地下シェルターにかなり大型の物を。」

「彼」が戦いの中でたまたま地面に露出していた物を見つけなければ

ば、最悪の事態も有り得た危険な状況だった。」
と、詳しく説明した。

「……情報が……足りなかったのね？」

モモは驚いた顔をした後にＴシャツの裾を握り締めて静かに泣いた。

「まったく。何年もかけて自分の街に爆弾埋めるなんて変なヤツらだよなあ。一般市民だった人には気の毒なことだよ、ま、テロリストの方が多いような街だったけど……普通何年も前から地面に埋まっていた爆弾の情報なんて

ある方が変なんだって、わかるヤツなんていないよ。

そんな事に責任を感じるくらいならさ、

帰って来てすぐ人を気を失うまで絞めあげた事に責任感じてよ。」

いつの間にか目を覚ましたアルが座ったまま腰に手を当てて伸びをしながらい言った。

「おっちゃん、後で報告書出すから医務室行っている？」

「そうしなさい。ああそれと

「彼」もいつも通り医務室にいると思うからお礼をね。」

「了解。あんがと。それと、通信機越しでもハル君ビビってたから、ま、一応報告ね。」

第11話 移動く医務室

短く言葉を交わすとアルはハルを背負った。そして下を向いて泣いている少女を

「よっ…ツと」

「ひゃ!？」

優しく抱きかかえた。

「え？アル？私は、え？」

完全に混乱した少女にアルは

「女性が泣いている時は紳士的に、優しく。これ常識。」

何故か片言で言った。

「ふいゝ、重かった。おっちゃんの部屋から医務室ってこんなに離れてたんだね。」

背中アルはまだうなされていた。

「ついたんですか？………ていうか重いつて…酷くないですか…？」

医務室の前で青年に抱えられていた少女が言った。

青年に抱きかかえられている状況が恥ずかしいのか顔を手で覆っている。

今までと違い何故か敬語だった。

「ああごめん、多分、任務地からバイクで帰って来てすぐに絞めあげられたから重く感じたんだよ。」

青年は笑いながら皮肉っぽく言った。

「…………ごめん。」

「アハハ、冗談だよ。さて早く治療済ませて書きたくもない報告書

を書い寝るか!」

「…ごめん。」

「冗談だって、多かれ少なかれどうせ書くんだし。よっ」と

アルは行儀悪く足で医務室の扉を押し開けて中に入った。

「あらあらあら、若いっていいわねえ、任務から戻って来てすぐ彼女を抱っこして医務室までベッド借りに来るなんて。」

白衣を来て椅子にダラツと座って眠そうに煙草を吸っている女性がいた。歳は20代後半ぐらいに見える。隣には大きな止まり木があった。

「な、に言っちゃってんのさ姐さん。ほれ、背中見てみ背中。」

そっぴいとアルは振り返った。

第12話 医務室で

「あら、陽菜君じゃない、……もしかしてその若さで3P!? さすがにお姉さんそれはトメルよ?」

「アルおろして、」

「あい」

アルの腕からトンツと降りたモモが女性に向かってスタスタと歩き、目の前で止まって耳元で囁いた。

「あゝ…なんだか頭がいたいなあ…お姉ちゃんが変なこと言ったせいかなあ…このままだとボーツとしてつまずいてお酒の棚に突っ込んでんじやいそう…」

「さあ治療を始めるわよ!! 陽菜君ね!? 早くベッドに寝かして、早く! お願いだから!!」

女性はかなり焦って準備を始め、少女はアルに向かって笑いかけた。

「アル、あなたもよ。」

「いや、今回は曇ってたから問題ないよ。」

「帰り道はかなり太陽が照ってたハズだけど? てかいから座れ。」

「そういえばカケルは?」

「出かけてる。そんなんでは話がそらせると思ってたのか、いいから座れ。」

「…はい」

女性は手に持った怪しい色の液体が入った注射器をアルの腕に突き刺した。

「いやゝ、けど毎度毎度凄いな、狙撃手とはいえ擦り傷もないんだもんねえ。」

嬉しそうに言う女性に

「……体がダルい、」

恨めしそうにアルが言った。

「私のせいじゃないよ。寝たら治るからさっさと寝ちやいなよ。」

「姐さんとモモがいる所で寝るの怖がフウ」

腹部を二人に強打されたアルが情けなく倒れた。気を失う前に最後の力で

「血筋の問題ですか……………？」

とだけ言って。

第13話 医務室で

目を覚ましたハルの寝惚けた耳に聞きなれない声が聞こえた。

「ね、モモ。お姉ちゃんさっきふと思ったんだけどね、若いね！！最近の隊員はどうしたんだろうね！！」

「いや知らないよ。てかココにいる隊員がお姉ちゃんより若いだけじゃない、いいじゃん別に。」

「よくないよ、このままだと私その内『長老』とか言われるよ！？いいの！？愛する姉が長老でもいいの！？」

「愛してないし、お姉ちゃんより歳取ってる人いっぱい居るし。けどいいじゃない。長老、カッコいいよ。長老」

「長老違う！皆に聞かれたらどうすんの！！アルは熟睡（気絶）してるけどそろそろハル君が起きるんじゃない……」

「…………おはようございます、長老。」

寝惚けたハルはいきなり地雷を踏んだ。

「……………」気まずい沈黙の後でモモが一人、笑いを堪えていた。一方頭が徐々に覚醒してきたハルはだんだん焦ってきた。

「…………なんだろうこの沈黙は…僕はさっきなんていったっけ？

長老？

誰が？

もしかして渚さんに？

……あ、正解っぽい……ドウシヨウ、顔に出してないけど怒ってる、凄い怒ってる、メツチャ怒ってる……背後に何か見える。

……謝ろう、そうだ、全力で謝ればまだ間に合う……希望を捨てちゃダメだ……!」

「あの……渚さん……すみませんでした……!僕、その……ちょっと寝惚けてて」

「ハル君、お腹減ったでしょお?これえ食べてみてえ?」

妙にまとわりつく様な猫撫で声でそういうと部屋の端にあつた冷蔵庫からラップのかけられたケーキとフォークを取り出した。

その時少女が笑いを堪えるのをやめて驚いた顔をしていた事にハルは気付かなかった。

第14話 ケーキ

「……………頂きます。」

ハルは、寝惚けていたとはいえ、まだ若い女性を長老扱いして断わる事が出来ない空気の中、あからさまに不安そうな声で承諾した。

「食べさせたい」

「あの…できれば自分で食べ」

「食べさせたい」

「……………お願いします」

これ以上無いほど不安な表情をして、目の前に差し出された見た目は完璧なケーキを食べるため口をあけた。

パク…

「…!!? (辛い!?! いや… スパイ? 苦い…? すごい甘い?…
辛スパ苦甘い!?!)」

「美味しいかしら?」

「あの…とて、も…前、衛的な味だと、思、いま…す」

「涙がめっちゃ出てるわよ、ねえモモちゃん、泣いてるよ? どーする?」

「……………」

ソップを向いた少女はとて不機嫌な顔をしていた。

「あゝ、マシになったあゝ……ってハル君なんで泣いてんの！？ッ
い！！？」

起きてすぐハルが泣いていることに気付いたアルは驚いて一口分欠けたケーキを見てさらに驚いた。

「そそののケーキはままさかモモさんがその、つ、作ったその…アレですか？」

モモをさんづけにして、かなりどもりながらアルは聞いた。

「そう、食べる？」

そう聞かれたアルはいきなりガバツと布団を被って

「……すいませんお腹痛いのでマジで勘弁してください。」
と言ったきり動かなくなった。

「そんなに酷いかなあ……」

少女がボソツと呟いた声に対して医務室の女性、渚はハッキリと言
い放った。

「いやゝ、かなり酷いと思うよ？まずスペックがお菓子より兵器向
きだし、偽装はバッチリだし」

第15話 白衣の悪魔く脱出くアルの部屋

薬とアルコールと煙草の臭いがする医務室の中に4人。

静かに泣いている少年が1人と布団にくるまって震える青年が1人、
楽しそうに笑っている女性が1人、その女性を不機嫌そうな顔で半
ば睨む様に見ている少女が1人。

「とりあえずコレ飲んでいて。」

渚がハルに錠剤の瓶と水の入ったペットボトルを投げ渡した。

「なんの薬ですか？」

泣きながらもしっかりと薬を受け取ったハルがまた不安そうに聞く。
「さあ？なんの薬だろね？けど早く飲まないとヤバいかもよ？まあ
今回のコレはどんな被害が出るかまだわかってないからとりあえず
前に作ったヤツだけど、前はたしか……軽い幻聴だったっけ……？後
は吐き気か、吐いた人はいなかったけどね。医者の方に言わせれば
吐き気があるのに吐かないって逆に怖いよね。」
ケーキを見ながらヘラヘラと言った女性はまだ楽しそうに笑ってい
た……。

く夜くアルの部屋（1LDK）

「まだ気分悪い？」

傷や病を癒すための部屋での恐怖体験の後遺症を心配するアル

「ありがと、だいぶマシになりました。」

ハルは先輩にあたるアルの気遣いに感謝しつつテーブルに置かれたコーヒーを少しすすった。

「うん、よかった。また食堂のおばちゃんにもうモモには厨房を貸さん用に言いに行かなきゃなあ…死人がでる前に……」

冗談になってない冗談に自分で苦笑いしつつ3杯目のコーヒーを自分のカップに注いだ。

「モモさんの部屋ってキッチン無いんですか？」

「おっちゃんの使用禁止にしてる。ちょっと前にえらい事になってね……。」

眉間をおさえてうつむくアルの顔は微妙に青白かった…。

第16話 続・アルの部屋／明日の予定

「そ、そうだ！アルさん、明日予定ありますか？」

重くなった空気を変えるようにハルが聞いた。

「あゝ、うん、特に無し。ひと仕事終ったしね、ハル君どうか行きたいとこあんの？」

アルは苦い記憶を振り払うように頭を左右に振ってから聞き返した。
「ガンスミスのおじいさんの所に行こうかなあって思ってるんです。ここに来る前に自分の部屋で電話で頼んどきました、ついてきてくれますか？」

「あゝ、じいちゃんの『銃工房』か。そだな、忘れてたけど俺も銃みて貰った方がいいかもなあ。明日の何時？」

「朝の7時に行くって言いました。」

「了解。ほんじゃ6時40分に公園の噴水前に集合ね、バイクで送ったげるから。ハル君、じいちゃんトコ行くの初めて？」

「ありがとう。うん、仕事場に会いに行ったコトはあるけど整備頼みに行くのは初めて。」

「成程……朝ごはん、あんまり食べない方がいいかもよ」

「?どうしてですか？」

「ん？じいちゃんとおっちゃんに興味で作った特殊な訓練機が工房の地下にあるんだけどね、体質にもよるけど初めは結構キツイんだ、酔うって言うかクラクラするって言うか…俺も初めての時はヤバかったしね…」

アルは昔の

「ヤバかった」時を懐かしむように目を細めた。

「…ここは変わった人や変わった物が多いですね……。」

「楽しいでしょ？」

自慢気に笑い、首を傾げながらアルが聞いた。その問いに

「はい、とても。」

ハルも笑いながら答えた。

第17話 続・アルの部屋へ予定決定、おやすみ。ゝ

「気に入って貰えてよかった。あ、それで明日の話だけどさ、ハルくんて銃いくつ持ってる？」

「3つです。狙撃銃1つと携行性重視で選んだ拳銃が2つ。あ、それとここに来る前から作ってた自作の銃が造りかけで部屋に1つあります。」

「へー！自作！！器用なんだねえ。どんなの？」

「どっちかって言えば威力を重視しました。重量を少し重くして発砲時のブレを小さくしてます。近接戦闘にも対応できる用にした拳銃です。」

「近接戦闘かあ、俺苦手なんだよなあ…明日ちよつとだけ訓練しようかなあ？手伝ってくれる？」

「いいですよ。実践ですか？」

「実践…て言うのかな？さっき言った特殊な訓練機使ってさ。」

「ああ、どんなのなんですか？その訓練機。」

「ん…簡単に言えばバーチャル空間で訓練をする機械なんだ、椅子に座った状態で頭が体を動かそうとする電気信号を機械が受け取って脳空間のその人物を動かすことの原理が…？ ……………だあー！！もう無理だ！！！！」

頭をガリガリと掻きながら説明を放棄した。

「……難しい原理なんですね……。」

説明を途中で放棄したアルを慰めるようにハルは言った。

「それよりさ、明日は造りかけのも含めてさ銃全部持って行こうよ。じいちゃんならいいアドバイスくれるよ。」

アルはもう特殊訓練機の説明を完全に諦めて話題を変えた。

「そうですね、そうします。ところでアルさんはいくつ銃を持っているんですか？」

「6つ、それぞれタイプの違う狙撃銃が3つに拳銃が2つ、あとちよつと変わり種が1つ。」

「変わり種？」

「明日見せたい。ま、楽しみにしててよ。」

アルは歯を見せて

「にっ」と笑い、ハルは『変わり種』について色々と考えている。

「んでさハルくん、時間大丈夫なん？明日は休みだからいつもよりはゆっくりだけどそろそろ寝た方がよくない？」

時計を見ながら言う。

「うわっ！もうこんな時間！？ああじゃあもう失礼します！今日は

お疲れ様でした！！」

「あいよ、また明日」

アルはひらひらと手を振ってハルを見送った。

第18話 3人目

翌日

6時25分、公園噴水前、

抜けるような青空の下、眼帯をつけたアルが噴水の近くにある一際大きな木の影に座ってタバコを吸っている。

近くに停めてあるアメリカンのバイクには3本、狙撃用ライフルが立てかけていて、後ろには大きなバッグが付けられていた。

「ふ、もうすぐか。準備運動でもしとつかね……。」

そう言っただけで短くなったタバコを携帯灰皿に投げ入れて伸びをした。

6時30分、公園噴水横広場

「ほっ、はっ、っせい！」

噴水横の公園は50m×80mと広い。だいたい半分のスペースを使って遊具が適度な間隔で20程設置されていて、残りの半分は芝生が全体に敷詰められた広場がある。

アルが遊具の中に当然のように混ざっている吊り下げ型のサンドバッグを軽く殴って運動をしていると

「おいおい！アルー！朝っぱらからなにしてんの？トレーニングー！！？」

300m程離れた家で窓から身をのりだしたモモから声がかかる。

「あゝおはよう。準備運動だよ。」
アルが自分の感覚で返事をする。

「えゝ!?なにゝ!?」

当然のように大声で聞き返された。

アルは息を吸ってから目をつぶってから

「じゅ・ん・び・う・ん・ど・う!!!」

大声で返してから目をあけて窓を見た。そこには既にモモの姿は無く、窓から垂らされた太めのロープが踊っていた。

下を向いてため息をついたアルの耳に自転車が近づいて来る音が聞こえた。もう一度目を閉じて音を聞くことに集中する。

『また速くなってるな……あ、ギア変えた、……後10秒…3、2、1。』

目を開けた。

「おはよ。ロードレーサーの部品どっか変えた?」

「なにしてんの?」

「…質問に答えてよ、まあいいけどさ…。じいちゃんのトコ行くから準備運動。………どしたのさ?」

アルは黙って自転車にまたがり直すモモに向かって聞く。

その問いにモモは

「私も行く銃取って来るちようど壊れてる。」

と区切らず早口でまくしたてた。

第19話 いや、初めから見えましたよ。

「ちよい待ち！」

「なに？」

「後ろは乗れないよ？」

「…なんでよ？」

あからさまに不機嫌な声でモモが聞いた。

「ハル君も来る。後ろは無理。OK？」

「やだ」

口を尖らせてアルを睨む。

「ワガママ言わない、お姉さんでしょ！」

アルがなぜかお母さん口調で言った。

「……だいたいさ、…本当に壊れてる？モモの『エボニー&アイボリー』ってじいちゃんの傑作じゃん。昨日の任務前にも一緒に行っただし…ねえ？」

腕を組み目を細くして自分より頭1つ分小さいモモの顔を覗き込む。疑いの目。

「そ、んなコトあるワケないじゃない？」

詰まったことを誤魔化すように普段とは違うとってつけたような落ち着いた口調で答えた。

「ふう……しょうがない、ハル君に相談したげるよ」

ため息をつきながらも笑顔でモモの頭をワシワシと撫でた。

「やた！アル大好き！！」

モモがアルに抱きついて嬉しそうに言った瞬間に2人に背後から声がかかった。

「あのー、終わりました？」

振り返ったアルの目に地面に直に座ったまま首を傾げるハルが映った。

「うお！？いつからいたの？」

アルとモモは本気で驚いている

「えーとですね…『おはよ。ロードレーサーの部品どっか変えた？』のくだりからですね。」

「……それ初めじゃん！！！うわハズイ！！来てたんなら教えてよ！！」

「あ、すみません。男女が仲良く話している時に話しかけるのはどうかと思います。…話しかけて良かったんですか？」

「いや…まあその…兎に角、今度からは変に気つかわなくていいから！あー本当に…ハズイ」

2人はうつつ向いて本気で恥ずかしがった。

「気をつけます。それはそうとモモさん、自転車貸してくれます？」

「え？」

「後部座席乗るんでしょう？」

「あ、いいの！？ありがとー！」

「はい。」

「じゃあハル君。3、4分ここで待ってて、モモの銃取ってくるから。」

「了解です。モモさんの部屋では2人ですけど急いで下さいね？」
ハルはいつもより少し丁寧な口調でそう言つとロードレーサーの隣に座りこんだ。待たされた事を少し怒っているのかも知れない。ア
ルとモモはまた顔を赤くして

「勘弁して下さい。」

と言ひバイクに跨つて遠ざかつて行つた。

第20話　　くつまり赤血球が多いんですく

「じゃあスピードはハルくんに合わせてから先に行つてね。坂道、キツかったら降りてもいいから。」

戻つて来たアルがモモにヘルメットを渡しながら言った。バイクの後部座席に乗っているモモの腰のホルスターには右側と後ろ側にマグナムリボルバーが収められていた。

「わかりました。じゃあ…急がなきゃだし速めにいきます。」

ハルがロードレーサーを前傾姿勢で漕ぎはじめ徐々にギアを重くする。少し漕いだ後にスピードを出すためにダンシング。

時速65km

「モモさん！！このロードレーサー！！かなりいいですねー！！」

風とバイクの音にまけないように大声で言う。

「ありがとー、ハルくん速いねー！」

「ちよつてハルくん速すぎない？バテるよ！？」

「大丈夫です！」

予想外のハイペースに驚きながら少し後ろから着いてくるアルに返

事を返し、またギアを重くする。アウター×トップ。時速80km

「速すぎるよ！？うん、絶対速すぎる！！もうすぐ坂あるけど大丈夫！？」

「大丈夫です。」

坂に入る。

徐々にギアを軽くしてダンシング。

時速50km

7時02分、銃工房到着

「早く入りましょう。待つてるかもしれません。」

「了解。ハルくん疲れてない？」

「大丈夫です。僕、特異体質でヘマトクリット値が普通の人より極端に高いんですよ。」

「それは結局つまりどゆこと？」

バイクに跨ったまま2人が同時にきいた。

「結局つまり普通の人より疲れにくいってことです。」

少しおどけた感じで、ハルが答えた。

「え、いいなあそれ。俺の特異体質なんか不便なのに……」

「私なんか特異体質ないよ？」

「モモ目いいじゃん、動体視力。」

「皆何かもってるものなんですよ。さあ、早く入りましょう。もう約束の時間を5分過ぎてます。」

ハルが左手の時計を見ながら言った。

「おっと、そうだね。じゃ危ないから俺から入るわ」

ヘルメットを手に持ったままアルが扉に近づく。

「危ない？」

「下がって。」

モモがハルの服の襟を引いて退がらせた。

第21話 ゴムでも撃つこた無いでしょう。

カチャ、ギイ

「じいちゃん、来たぞー。」

アルがヘルメットを顔の前に構えて顔だけを扉の隙間から出した。
バンバン

2発分の発砲音が響き、アルの構えたヘルメットに6発の弾丸が当たった。

「!？」

ハルは反射的に腰のホルスターに手をのばしピストルを手にとりスライドロックを外し手動で1発目を装填し、両手で構えた。

「大丈夫、あれ、やーらかいゴム弾だよ。当たるところによったら泣くほど痛いけど。」

そう言いながらモモはハルが構えた銃を上から掴んだ。

「遅い!!」

店の奥の畳座敷から迷彩柄のタンクトップに黒いジーンズ姿の老人が叫んだ。

老人の名前は笹倉玄慈。WPMの敷地内でガンスミスの仕事をしている。本部長と共にWPMを立ち上げ、要職を蹴ってガンスミスになった変わり者だ。

玄慈のしゃがれた声は老人のそれだったが長身痩躯の体には無駄な

脂肪が無く、引き締まっていた。

「色々あったんだよ、てから分じゃん、許してよ。てゆーかクイツクドロウやっていいの？」

ヘルメットを顔の前からのけながらアルが聞いた。
パンツ

「痛ッ!？」

「余計な心配じゃ白髪頭」

につ、と笑いながら老人が言った。その右手にはマグナムリボルバーの銃、左手には全体的にほっそりとした銃が握られていた。

「いったー!! 痛いよマジで! なんでじいちゃんがリボルバー以外の銃持つてんのさ!？」

左手を出しながらアルが老人に近づいた。

「それがなあ…我が愛する妻とちよいとケンカしちゃってな…。でだ、アイツの作図した通りに作ってみたらこれがまたどうだ、いい銃だ! いやーリボルバーだけが銃じゃないな。」

「何を今更。俺の銃、全部じいちゃんが作ったくせに。それにはあちゃんの設計ならいい銃とか当たり前じゃん。」

「そりゃそうか! 因みにお前の銃は嫌々だ。」

アルが出した左手に当然のように銃を渡す。

「おーい、終った？」

開ききった扉をノックしながら2人が部屋に入った。

「おお、百恵に陽菜も一緒か。じゃあまず試射場に行くか？」

そう言うのと腰に工具が収納された袋を巻き付けた。

「『まずお茶飲もう』って言っても無駄なんですよ？」

アルとモモが同時に言った。言った後にハルを除く3人が笑ったところを見るとお決まりのジョークらしい。1人取り残された感のあ
るハルが悔しそうに

「次こそは…！」
と呟いた。

第22話 そんなに必要なんですか？

試射場

『銃工房』の奥の部屋にある試射場には距離を調整できるのが7つある。

隣の部屋から行きと帰りのベルトコンベアが出ていて壁には耳を保護するヘッドホンが、棚にはゴーグルが、それぞれ必要以上においてあった。

「よっしゃ、じゃあまず撃てる銃を右の台に乗せな、撃てんのは左の台だ」

テキパキと準備をする老人が3人を見ずに言った。

「あいよ、手伝うことは？」

指示される前に台に銃を置いていたアルが尋ねた。

「あー…隣から弾送って来てくれ。必要なヤツを…そうだな、一丁につき30だ。サバ読んだら撃つぞ。」

「はいはい、合計330ね。じゃ行ってくるわ」

そう言うのとポケットに手をつ突っ込んだまま小走りで隣の部屋に入って行った。

後に残されたハルは右の台に乗せられたナイフを不思議そうに見て

いた。

カシャ、ガチャ。
パン、パン、パン

玄慈が台に置かれた銃を撃つ。撃つ度に首を少し傾げ工具を使い、ばらして整備をし、また撃つ。

右の台に乗せられた9丁の銃を撃ち終った後に

「よし、大丈夫だ。」

とだけ言って左の台に乗せた銃をばらし始めた。

ガキン！カチャ カチャカチャ、ガチャ

中身を確認に必要な部品を変え油を挿し組み立てる。
バンバン、バン。

「よっしゃ！直ったぞ。後は自分で撃って確かめろや。それからモモ、エボニーとアイボリーは壊れてない。」

「やっぱね」

アルがため息をつく。

「アルさんこのナイフ？撃ってみてもいいですか？」

ハルが的を撃つ手を止めて尋ねた。

「ん？ああ、いいよ。見本みせたげる。あとね、まだ言ってなかったけどそのナイフの名前はシードだから」

アルが隣に来た後、ハルはモモにだけ見えるようにウィンクした。
『ありがとう』

モモが声に出さずに口を動かした。

「そっぴやさ、あの訓練機、今日使える？」

アルが

「シード」の使い方を一通りハルに教えた後で聞いた

「ああ悪い無理だ、一昨日バラしちまったわ。それよりも陽菜、これ組むの手伝っていいか？」

さして悪いとは思っていない事が伺える声で謝った後、子供のよう
な瞳でハルを見て期待を込めて言った。

「あ、はい。お願いします。」

ハルは玄慈の瞳の輝きに少しうつろたえながらも了承した。

第23話 完成。ゼクト、ゴラエス、ランプレッタ

「よっしゃ、じゃあ座敷まで来てくれ、俺も造りかけがあるから工具も出してある。白髪と百恵は適当にイチャついてろ」

そう言うのとハルの腕を掴んで引つ張った。後に残されたアルとモモはゴム弾を詰めた銃を玄慈の出でいった扉に向けていた。

2時間後

「飽きたねえ」

「ああ、飽きた。オカゲで微調整バッチリ、まあ今頃は名前でもつけてんじゃない？」

座敷

「ツツできたー！ありがとうございましたー！久しぶりに作ったから不安だったんですけど玄慈さんのおかげで思い描いてた通りの銃が出来ました！」

ハルは嬉しそうに笑う。

「お、そりゃよかったな。いやーけど陽菜は才能あるわ。さて、じやあ名前決めるか！名前！！」

やりきった。という顔と声で清々しく言った。

「え？」

ハルは突然の提案にうろたえる。

「え？じゃねえ、名前だ名前。量産型じゃねえ自作の銃には名前をつけなきゃ始まんねえじゃんよ」

玄慈はさも当然の事を言っただように腕を組んでため息をつく。

「そうなんですか？じゃあ……………」

「ゼクト」なんてどうでしょう？」

玄慈の態度を見たハルは『ああそういうモノなのか』という顔を少し考えた後言った。

「ほゝ、その心は？」

「神話の中で魔神の側近をつとめる3匹の黒犬の1匹です。」

「魔神の側近か…いいじゃねえか、いいセンスだ。」

「ところで、この銃の名前はなんていうんですか？」

「あゝ、まだ考えてねえや。完成してからつける派なんだ。」

ハルは『僕の銃の名前を完成後すぐに聞いたクセに』と思ったが口には出さず。

「そうなんですか。」
とだけ言った。

「そうだ、黒犬、残りの2匹の名前はなんてんだ？」

「確か…」

「ゴラエス」と

「ランブレッタ」です」

「よっしゃ！決定だ。そっちのちよつとデカイのがゴラエスだ、んで普通サイズがランブレッタ。」

「そんな簡単に決めちゃっていいんですか！？」

「気に入りゃいいんだ。」

「…そんなもんなんですか。」

「ああそんなもんだ。さあ、銃も出来たことだし白髪達呼んで茶あでも飲むか！！」

「了解です。じゃあ2人とも呼んできます。」

「おー、頼んだ。」

玄慈は立ち上がって台所へ向かいながら手をヒラヒラと振って軽い口調で言った。

第24話 畳の下からコンニチワ

「アルさん、モモさん、入っていいですか？」

公園であつたこと繰り返さない為に分厚い扉をノックしながらかなりの大声で尋ねる。

「……………」

しかし、繰り返し呼んでも返事が戻って来ることはなかった。少し考えた後、

「入りますよ」と言つてゆっくりと扉を開いた。

「ぐう」

「すう」

部屋に入つてすぐに、壁に設置されたスピーカーから何故か寝息が聞こえてきた。

「……………マイクは…奥の部屋かな？」

独り言を呟きながら奥の部屋に進んで行つた。

「あれ？」

マイクを接続する機械はあつた。その機械の上には木箱が置かれていて、スイッチが押されていた。延びたコードは床に落ちてスタンドマイクは5畳の畳座敷の下に入り込んでいた。

「？」

畳座敷の下に空間があることを初めて知ったハルは身を屈めてその空間を覗き込んだ。その瞬間、左の足首と床につけていた右の手首をいきなり、かなりの力で掴まれた。

「うおわっ！？」

情けない声をあげながら尻餅をつき後退ろうとする。それでも足首と手首を掴む手は力を緩めずに動く事ができなかった。

「ん……ふぁー…ん？なんだコレ？」

「ツ！？イツツタイ！！痛い痛い！！ちよつ、タンマ折れる！！」

寝惚けたアルは寝起きとは思えない力でハルの足を目の位置まで持ち上げようと捻りあげた。

「…ああ、ハルくんか。何してんの？」

薄目を開けて尋ねる、
手に力を込めたまま。

「早く離して下さい…」

ハルは切迫した泣きそうな声で弱々しく言った。

「なにを？……ああ、あゝ、はいはいはい、ゴメン。モモ、起きな、そして手を離そう。ハルくんが泣きそうだ」

まだ眠いのか薄い反応を示した後で隣で眠っていたモモの頬を薄い

掛布団の上で繋いだ手を離してペチペチとたたいた。

「…ん？……あ、おはよう。ん？なにコレ？」

寝惚けたモモはハルの手を目の位置まで持ち上げようと捻った。

「ッ！？イッツイタイ！！痛い痛い！！ちよつ、折れる！！？デジャヴ！？」

「ああ、ハルくん？何してんの？」

「…ッ手を…離して下さいお願いします」

「あ、あゝ、ゴメンゴメン。許して」

パツと手を離して薄い反応で謝る。その後2人は畳座敷の下のスぺースから這い出してきた。眠そくに頭を掻きながら畳に座った。

第25話 魔神の側近と魔人の銃

「銃はできた？」

うつ向いて頭を掻いていたアルがパツとハルの方を向いて聞く。

「はい、今さっき完成しました。試し撃ちはまだですけどいいデキですよ。」

嬉しそうに笑いながら言った。

「へー、そりゃ良かった、名前は？」

「ゼクトです。玄慈さんが作ったのはゴラエスとランブレッタ。」

「わ、一緒だ！！なんか嬉しいなあ」

それまで座ったままボーっとして寝ているのか起きているのかわからなかったモモがいきなり大きな声を出した。

「うお！？ビクツた！！なにが一緒なの？」

「おんなじ神話から名前取ってるの。ね、ハルくん。黒犬でしょ？」

瞳を輝かせながら自分の中ではわかりきった答えを確認する。

「あの神話知ってたんですか！？………そういえばエボニーとアイボリーは魔人が持ってた銃ですね、リボルバーだから気付かなかった！！」

その質問にまさか知っているととは思わなかった、と言う風に驚いた後でエボニーとアイボリーを思い出し、なんで気付かなかったんだろ。と言う風に声をあげた。

「そうなんだよね、エボニー & アイボリーはリボルバーじゃないんだけど…おじいちゃんの趣味でリボルバーになっちゃったんだ…リボルバー以外の銃の良さに気付いたのを機に新しいの作ってくんないかなあ…」

「んでさハルくん。もう帰るの？」

アルが自分が入れない話題に見切りをつけて話題を変えた。

「あ、いえ。玄慈さんがお茶を煎れてくれるんです。だから2人を呼んで来てくれって」

「マジで!!!？」

「ホント!!!？」

2人が同時に半ば叫ぶように聞いた。

第26話 味は茶道有段者の如く

いきなり大声に驚き、色々な考えがハルの頭をよぎる。

「えっ！？あ、はいホントです。どうかしたんですか？……まさか玄慈さんの煎れたお茶もモモさんの作ったケーキみたいに……」

途中まで言っただ後に殺気に気付いたハルは急いで口をつぐんだ。

「違う違う。珍しいから驚いたん。機嫌がいい時しか煎れないんだ。味は保証するよ！かなり美味しい！！ヤバいくらい。プロの煎れたコーヒーぐらい美味しいんだよ！！？」

タイミング的にはフォローだがフォローと言うよりは素直に喜んでいる様子のアルは早く行こう。と言う風に立ち上がってソワソワしている。

「コーヒーに例えるのはわかりづらいでしょ、もったい……茶道の段を持つてゐるぐらい的な表現の方がしっくりくるんじゃない？」

殺気を感じなくなったモモがやはりはしゃいだ感じで言う。2人の反応を見るとハルも自然と期待が募る。

「うわぁ、すごい楽しみです！それじゃあ早く行きましょうか！！」

「よっしゃ！じゃあ急ごう！じいちゃんの機嫌損ねたら大変だ。」

「そうだね、急ごう！！あゝおばあちゃんお茶菓子作ってくれない

「かなあ！？」

幼い子供のような期待を込めた声色でモモが言う。

「いーねえ！！疲れてるから甘いモノ食べたいなあ……」

「たしかアリーさんは今この家にいるはずですよ。靴が前に来た時と同じだけあったから。」

「ハルくん記憶力いいんだねえ……あと洞察力。羨ましいな」

「ホント、記憶力いいって羨ましいなあ……私悪いのよねえ……」

感嘆の声をあげる2人を見ながら恥ずかしそうに頬を掻く。

「ありがと、って早く行かなくちゃ！！」

「「そうだった！！」」

3人は大した距離の無い通路を駆け足で玄慈の元へ向かった。

第27話 抹茶アイス

「おっ、やっと来たか。早くこっち来て座れ。」

藍色の作務衣に着替えた玄慈がついさっきまで油や掃除棒や工具が散らばっていた畳を綺麗に掃除さして畳の上に茶道具を広げ、あぐらをかいて手招きをしていた。

どうやら機嫌を悪くせずにするらしい。3人はホツとしながら畳の上に座った。

「よし、そんじゃあ今から抹茶煎れるワケだが……今日は自家製抹茶が少なえんだわ、ああそんな顔すんな。まあ落ち着け、抹茶は少なえがコレがある。」

抹茶が少ない、と告げられ少し不満気な顔をした2人を見た後で玄慈は振り返り小さな冷蔵庫から木の箱を取り出した。

冷やされた木箱からは冷たさを主張するような白い煙が薄く出ている。

冷蔵庫から出てきた箱をハルは『なんだろう』と言う風に、アルとモモは期待を込めて見つめた。

「ほれ、抹茶の変わりだ。」

蓋を開けられた箱からは、今まで溜め込まれていた冷気が一斉に逃げ出した。

「いよっしゃー!!!」

「わ、やった!!!」

「わあ、美味しそうですねえ……」

蓋を取られた箱の中にはアイス（ジェラート？）が詰まっていた。
シットリとした質感のそれは抹茶色をしてある種の貫禄のようなモノを漂わせながら箱に収まっていた。

「最近は特に暑かったからな、愛する妻が作ってくれたんだ」

自慢するように胸を張り、のろける。

「まあとりあえずコレ食つてろ。」

涼しげな硝子の皿を冷蔵庫から、銀のスプーンを棚の引き出しから
3つずつ出して3人の前に置いた。

ガンスミスの老人の家にセンスのいい食器、妙な感じがするがおそらくは彼の愛する妻の趣味なのだろう。

「ウマー!!」

「んおいしー!」

「わぁ…美味しいですねえ…」

冷えた皿にのったアイスをスプーンで掬って口に含み味わった後で
各々感嘆の声をあげる。

「茶あ入ったぞ、自家製と市販の混ぜたヤツだけだな、」

アイスを食べ終えた3人の前に出された湯気の立つ湯飲みは上品な
色の抹茶でみたされていた。

3人が湯飲みに手を出そうとした瞬間

「おーい！お団子食べるう？食べるよねえ？イッパイあるよお」

ドアが突然、勢いよく開いて女性の声が部屋に響いた。

第28話 小さな歓迎会

「ばあちゃん！もしかしてそれ作りたて！？」

「そーだよー、今さっき出来たとこさ！！」

楽しそうに親指を立て自慢をするように言った。

アルに

「ばあちゃん」と呼ばれた外国人女性は俗に言う『かわいいおばあちゃん』だった。名前はアリー、外国人にしては小柄で華奢な体に整った顔立ち、明るい灰色の瞳、口調も若々しく後ろで一束にまとめた薄いブラウンの髪の毛を揺らして朗らかに笑っている。

「ホントに今日はどーしたの！？アイスに抹茶にお団子ってスッゴイ豪華！！いつも今日はめんどくさいから嫌、とか言って作ってくれないくせに！」

モモは一応、といった感じで文句を言うが

「ハルの歓迎会みたいなものよ、さあ早く食べて食べて、お団子は早く食べた方が美味しいのよ！」

案の定アリーは文句だけは聞こえなかった、といった風に話を進めた。

モモはため息をつきながらも訓練の後のお茶会を楽しむために気持ちを切り替えた。

「んじゃあ、世界の平和と安定を守る仲間がまた1人増えたことを

祝って、」

玄慈はそう言うと共に湯飲みを持って前に差し出した。

「仲間の安全と平和な日常を祈って、」

アリーは玄慈に続くように言葉を続けると同じように手を前に出す。

「乾杯！！！！」

5人は声を揃えて大声で言い。歓迎会を始めた。

「ウツマイ！！」

「おいしいー！！」

「これホントにどうやって作ってるんですか！？」

「おっ、やっぱり最高だな！！」

「お抹茶おいしー！」

その後、団子の作り方、お喋り、銃の話、ノロケ、その他色々な事を話し、お開きになったのは夜になってからだった。

第29話 趣味はナニ？

夜〱ハルの部屋〱

ハルの部屋は壁に掛った銃やナイフ、ベッドと机、小さなダンス以外は何も置いていない、キッチンがリビングと区切られているため寒々しさすら感じる生活感の無い部屋で3人は会話をしながらトランプを楽しんでいた。

知っているゲームをほぼやりつくし、ハルがトランプを片付けている時にモモが前振りなく、いきなり言った。

「ねえハルくん。ハルくんの趣味ってなに？」

いきなりの質問にハルは少し困ったような笑顔を浮かべた。

「あゝ俺も知りたいな。ハルくんの部屋生活感無さすぎだよ、趣味とか全然わからんもん」

ハルの顔が見えない位置に居たアルは

「困ったような笑顔」を無視した。

「趣味とかそういうのは…無いんです。本部長に拾われてからはこの人の役に立ちたいってずっと訓練してましたから……本部長は色々させてくれましたけど、趣味とまでは……すみません、暗くなっちゃって、僕、コーヒー持ってます。」

後悔はしていない、お陰で昨日は役に立てた。ただ、生死を共にする友人に語れるだけの趣味が無いことが寂しい。ハルは苦笑いのま

まキッチンに向かった。

「ハルくん、ちょっと待っててね！すぐに戻るから！！」

「私も！ちょっと取って来る！！」

「えっ？ちょっと、取ってくるって……」

そこまで言った時にはもうドアは閉まっていた。

「…取ってくるって…何をですか…？」

質問する相手はもう部屋を出てってしまったが、なんとなく決まりが悪くハルは質問を一応最後まで言った。

第30話 趣味決定？とタカの訪問

2人が部屋を飛び出して数分後。

「お待たせい！！」

ドアを勢いよく開けてアルが飛び込んできた、背中にエレキギターを2本背負って左右の手にはアンプが持たれていた。

「アルさん、どうしたんですかいきなり部屋を飛び出して！……なんですかそれ？」

「ゴメンゴメン、ギターだよ、見たこと無い？エレキギター。さ、もうすぐモモも来るから来たら早速弾いてみよう！！あ、ハルくんは右利きだよね？」

そう言うときアルは状況が飲み込めず無言のハルにギターを持たせた。

「お待たせー！！！」

アルがギターをハルの肩に吊り下げた瞬間にモモが閉まりきっていなかった扉を蹴飛ばして入ってきた。

「お、似合う似合う。さあ、やってみますか！！」

モモは肩に掛けていたベースを前に移動させ、手に提げていたアンブ床に置きながら言う。

「ちょっと！ちょっと待って下さいよ！僕ギターなんてしたことありませんよ！？」

「問題無い、音楽は心を癒すっておっちゃんも言ってたよ?」

かくしてハルの趣味作りが始まったのだった。

カンカンカン

練習を始めて数十分、思いの外ギターのセンスのあったハルの趣味が半ば強引に決定されかけていた時、窓の外から鉄板を叩くような金属音がした。

「うわ、うーちゃんじゃない?」

「ああ…うーちゃんだよ、絶対。」

アルとモモはあからさまに嫌そうな顔で言葉を交わす。

「?」

また1人取り残されたハルは窓に近づきかかっていたカーテンを左右に開いた。

「クエ?」

「うわ!」

窓の外では止まり木に止まった大型のタカがハルの顔を見て首を傾げていた。その足には紙が結びつけられていた。

第31話 タ力が任務を知らせに来たよ

「ハルくん、窓開けたげて。任務かもしれない…あ、ちなみにその子、昨日の爆発から救ってくれた命の恩人の兄弟だよ。ウキタケって名前」

アルはため息をつきながら椅子に座り、窓に一番近い位置に居たハルに窓を開けるように頼む。

「……………あ、はい！わかりました！！……………えっ！？命の恩人の…兄弟！？えっ……………鳥！？」

半ば放心状態だったハルは混乱した後に慌てて窓の鍵を外して窓を開けた。窓枠の外側には紐が吊りさげられていて、その紐を辿ると小さな鐘が取り付けられていた。

「クウエ〜」

『うーちゃん』と呼ばれたタ力は大型の鳥とは思えない可愛い鳴き声で感謝の意を示す様に鳴いた。のだが、ハルは開いた窓の隙間から入って来た大型の鳥に少し身を引いた。

「おいで、うーちゃん。」

モモが鷹に声をかけると鷹は大きな翼を広げて机まで飛び、ハルの椅子の背にとまった。

その足からアルが結ばれていた紙をほどいて開けた。

「なんて書いてあるんですか？」

混乱から幾分立ち直ったハルが聞く。

「明日の朝5時に梓、陽菜、百恵、和秋の4人は本部長室に集合。詳しい説明は移動中に。だってさ、皆昨日の任務の事後処理で出払ってるのかな……あゝあ、練習はお預けか……」

「私も出勤かあ……結構久し振りだなあ、どんな任務だろ？」

「和秋がいるし待ち伏せとか争闘作戦とか長時間系じゃない？」

「4人で争闘作戦はツライなあ……」

「梓さんって誰ですか？本部長に貰ったプロフィールに梓さんて人いましたっけ？和秋さんは後方支援の人ですよね？」

窓を閉めたハルはゆっくりと椅子に向かって近づいて行く。その時のモモは呆れた顔をアルに向けていた。

第32話 生活感は自然に出るものだ。

「アル、まだ本名教えてなかったの？」

モモはアルを見ながらため息混じりで言った。

「えっ！？アルさん…本名梓って言うんですか！！？」

『アル』があだ名と言うことは直接本人から聞いていたものの本名はまだ聞いていなかった。と言うよりは、もう本名を聞くこと自体を忘れていた。

「うわっ！！ミスった！！口滑った！あー、もう！！やっちゃったよ！恥ずかし！！！」

アルは自分の名前を気に入っていないのか恥ずかしがり頭を抱えた。

「いいじゃん、別に。ハルくんはもう立派な仲間でしょ？」

モモは少し怒ったようにアルを睨んだ。

「そりゃそうだけどさあ…梓だよ、アズサ。男なのにあずさ。」

バツが悪そうにうつ向いてブツブツと誰にでもなく文句を言う。

「いいじゃないですか、良い名前だと思いますよ？」

「どーも、けどねえなんか嬉しくないんだよねあ…」

「いいじゃん、梓。じゃ、明日早いから私はもう寝るね。ハルくん、ベースとアンプ置いといていい？」

ワザとアルの事を『梓』と呼んでもモモが言う。

「あ、はい。いいですよ」

了承。

「あ、じゃあ俺も。明日からの任務が終わったらまたハルくんの部屋で練習しよう。」

「……了解です。けどあんまり僕に期待しないで下さいね？」

「なに言っちゃってんの、かなりいいセンスじゃん、すぐ上達するよ。じゃ、みんなおやすみ。また明日」

「じゃ、俺も行くわ。ハルくん、ウキタケ、おやすみ。」

「はい、おやすみなさい。また明日、頑張りますよ。」

2人が出ていった部屋には2本のエレキギターとベース、3つのアンプがスタジオのように配置されている。ハルは愛しそうにその楽器を眺めてからベッドに向かった。枕元ではウキタケがすでに眠っていて、少し驚いたがハルは穏やかな気持ちで怖がることなくベッ

ドに横になった。

余談だが、アルのプロフィールは名前の部分がマジックで塗り潰され隣に手書きで『アル』と書かれていたらしい。

第33話 夜が明け、任務説明、移動

翌日

朝5時00分

まだ昇りきっていない太陽が弱々しい柔らかな光を世界に放っている。

「平和な世界」を絵に描いたような風景。だが今日も、争いは続いている。

本部長室では任務の説明を受ける4人の姿があつた。

「以上。説明を終える。今回は急な任務になって申し訳ない。しかし今回の任務は世界の平和を保つ上で重要な任務だ。頑張つて励んでほしい。聞きたい事があれば移動中にアオさんに聞いて下さい。みんな、必ず戻って来るように。健闘を祈っています。」

本部長が本部長らしい厳しい口調で説明を終え、家族のような優しい口調で付け加えた。

「WPM空港」

基地から程近い平地には空港がある。それぞれ何機があるへり、飛行機は倉庫に収まっている。4人は空港の門までバスに乗って移動

した後、和秋を除く3人は雑談をしながら装備を背負って倉庫まで歩く。

「ところでさ、何番だったっけ？」

一緒に歩いている3人にアルが主語の無い質問をする。

「1番。」

4人の内で一番小さく、今まで会話に参加していなかった1人だけやたらと大きな荷物を台車に乗せて押している和秋が簡潔に答える。和秋は細いがシッカリとした体つきをしていて、顔は中性的。しかし体調が悪いのかと思う程に色が白い、むしろ青白いと言うにふさわしい色だ。白皮症のアルよりも白い。さらに肩にかかる程の長さの真っ黒い髪が目にかかっているせいで不健康な印象を受ける少年だ。

「1番かあ」

アルが一番遠くの倉庫を見ながら呟く。

「お父さんの話聞いてなかったの……？」

眉を寄せて不機嫌な顔でアルを睨むようにして見る。ちなみに和秋の父は本部長ではない。

「聞いてたよ、だいたいね。けどさ、昨日は銃工房にいたりハル君にギター教えたりで疲れてたんだ。そこに任務が舞い込んだもんだから疲れが残ってたね。」

「そう。じゃあいい。」

短く言つとまた顔を正面に向けて黙々と歩いた。

第34話 待ちくたびれたよ

（1番倉庫）

8つある倉庫の中で1つだけシャッターが開いた倉庫、その中には輸送機とも戦闘機ともつかない中途半端な大きさのあるプロペラタイプの、空色の飛行機が収納されていて、その横では工具箱を椅子変わりにして座っている女性がいた。

「お待ちしておりました。来る途中に敵と遭遇したのかと思いましたよ。手伝ってくれた整備士の皆様は別の機体のトコに行っちゃったしさあ、荷物も積み終わってたし、暇だったんだよ？」

倉庫の前に立つた4人を見て立ち上がり爽やかな笑顔で揶揄をしながら爽やかに嫌味を言う女性。

名前は橘葵。WPMでパイロットをしている。スタイルが良く知識が豊富でWPMの中では歳下だけではなく一部の歳上からも姉のように慕われている。

「話相手って言ったら『染赤』ぐらいだし、本ッ！当！に！！寂しかったなあ……無機物に話しかける女の気持ち、わかる？」

そう言いながら飛行機の胴体部分を軽くパンパンと叩く。

「ごめんアオちゃん、でもこれでも急いで来たんだよ？なんせ急な任務だったからさあ……」

近づきながらアルが弁解をする。

「あら、急な任務に間に合うように染赤を整備するのは楽しやなか

ったような気がするんだけどなあ……そこんトコどう思う?。」

最初は少し不機嫌だったが会話をしている内に4人を困らせる事が楽しくなってきたらしく、正論を言いながら相手がどうでるかニヤニヤしながら待っている。

「すみません葵さん。コレを僕が受け取りに行くために玄慈さんの所によって貰ったんです。」

ハルは腰に巻いているポーチの中で唯一横向きで一番細長いものから50cmほどの日本刀のような刀を取り出しながら葵に近付き、言った。

「……………ねえ、もしかして君がハル君?。」

今までアルの目を見て喋っていた葵がハルに顔を向けて聞く。

「はい、はじめまして。葵さん。」

「……………」

葵は無言で手招きをした。

「……?。」

ハルは3人を振り返って見た後で不思議そうに葵に近づいた。

第35話 仲のいい兄弟

ハルは自分を手招きで呼んだ女性の約1m手前まで歩いた。

「なんですか？ ツ！！？？」

「かつわいゝ！！！！ね、ハル君！今回の任務終わったらお姉さんの部屋来ない！？てゆうか来なさい！！」

葵は少し間合いを詰めてハルの両肩を手で力強く掴み瞳をキラキラさせながら自分の身になにが起こったのか理解出来ないでいるハルに早口でまくしたてた。

「待てこの色魔」

明らかな侮蔑を込め今まで静かに成り行きを見ていた和秋が口を開いた。口調も普段と違い幾らか厳しい。

「あ、和秋だ。居たの？でさ、姉にむかってなによ、色魔って」

今まで気が付かなかったという風にわざとらしくキョトンとした表情をつくる。

「そのままの意味。とりあえずその手を離しなさい。」

それを全く気にせず肩を掴む手を指差す。

「いいじゃん別に、なに？ヤキモチ？ここんとか一緒に風呂入ってあげて無いから？」

気分を害した、と言うような顔で和秋を睨みつけ挑発する。

「違う！！そもそも物心ついてからは無理矢理……………いいから早く任務地まで連れてってよ。急ぎの任務って知ってるでしょ？」

挑発に一瞬乗ってしまったもののその後冷静に仕事の話を持ち出す。

「はいはい、わかりましたよーだ、じゃあ乗って、早く早く。あ、食べ物はいつものトコね。あ、そうだー！ハル君荷物運び手伝って！！」

「待て、姉ちゃんさっき自分で荷物も積み終わってたって言ってただろ。」

ステップに足を掛けて和秋が言う。

「…………チツ！」

その言葉にあからさまな舌打ちをしてから

「ハル君、もう乗っていいよ。」

そう言っていると自分もステップに向かって歩いた。

「…………仲がいいんですね。」

後ろからハルが声をかける。その声に葵は

「まあね」

と振り返って嬉しそうに笑いながら答えた。そして『染赤』に乗る前に

「任務終わったら私の部屋に來ること、検討しといて。」と小声でつげ、ハルは苦笑いで返した。

第36話 私が神だ！

滑走路に進み出たプロペラタイプの飛行機、染赤は低いエンジン音を響かせ、少し高くなった太陽の光を浴びて青く輝いている。

「あゝ。こちらアオ聞こえてますか？どうぞ」

緊張感のまるでない声で飛行士が無線機のスイッチを押しながら喋る。

「こちらアル、聞こえてますよ。どうぞ」

「こちらハル、僕も大丈夫です。どうぞ」

「こちらモモ、私もオツケー。どうぞ」

「こちらカズ、大丈夫。どうぞ」

「オーケー、無線機は全部良好ね。新型は初期不良が怖いけど今回は優秀ね！さすが開発部！」

葵が頷きながら嬉しそうに言った。

「前の任務で使った旧式は不便だったけどね」

アルが首についている無線機のスイッチから指を離してボソツと小言を言う。アルの小言はエンジンから発せられる爆音とプロペラが回転することでおこる風切り音で誰にも聞こえなかった。

「よっし！じゃあ出発だ！！10秒後には離陸するから喋らないように！舌噛むからね！！」葵、行っきまゝす！！」

「……離陸前にふざけるなよ！？」

葵は2つあるエンジンレバーを手前に一息に引き、今まで踏んでいたブレーキを一気に離した。回転数を上げたプロペラが空気を後ろに押し出し急激な加速をした後、重たい機体がゆっくりと地上を離れた。

「はい離陸」。え、当機は只今から南に進路をとり、目的地に着くまでに1度南部基地に給油の為に着陸、一泊します。翌日トラブルが無ければ午前8時に出発、南部基地にはだいたい午後3時には到着予定です。質問ある人、無いよね？よし、じゃあ適当にくつろいでてね。後、離陸時に注意を無視して喋って舌嚙んだバカな弟に一言、飛行機に乗ってる時は私が神だ！！」

民間機のような気の抜けるアナウンスを無線を使い流し質問の有無を聞き質問タイムを強制的に切った後、舌を嚙んだ和秋に無茶苦茶なコトを言って話を終了した。

染赤は順調に高度を増し、基地から遠ざかり戦場に向かって行く。

第37話 空の上の作戦会議

「上空」

春の終わり特有の、夏の湿気を少し含んだ空気を押し退けるようにして輸送機と戦闘機の間程の大きさの飛行機が比較的ゆっくりとした速度で飛んでいる。中では若い人間達が地図を囲んで話込んでいる。

「比較的安全で待機可能なポイントは6つ確認してるから標的の動きを見て出来るだけ接近戦で静かに」

「アルさん、接近戦苦手なんじゃなかったんですか？3人ぐらいなら僕だけでも…それに」

「ツーマンセルは基本、それにアルは意外と動ける、けど標的の動きにあわせるより誘導して」

「ダメだよ、もし誘導中に仲間に連絡されたら状況が悪くなる」

「私チャフグレネード持ってるよ？」

「爆発音はどのくらいですか？」

「水中で弱めの手榴弾が爆発したぐらいかな？」

「作戦会議中失礼、こちら仲間外れの機長、当機は後5分程でWPM南部基地に着陸予定です。WPMと敵対してる国の領空とか色々考えて飛ばしたから遠回りだったしお姉さんとっても疲れました。」

ですので着陸の際は雑になって多少揺れるかもしれませんが気にするな、」

今まで黙って染赤を操縦していたアオが少し陰を含んだ物言いです話に入ってきた。

「了解、けど安全運転で頼むよ。アオちゃん」

本部の空港を出発して8時間、その間1人で飛行機を操縦するのはやはり疲れるのだろう、喉元についている無線機を使って

「乗客」に話しかける

「機長」の声色は本当に疲れていた。

「分かっている、シートベルトをしっかりしめて衝撃にそなえて、元々得意じゃないから酷いかもしんない」

「了解、任務の前に死んだら洒落にもならないしね」

「任務で死んでも洒落になりませんって…」

アルの軽口にはハルが適切につっこむ。

「いつまでもバカなコト言っていると僕みたいになるよ、」

和秋が舌を出す。少し血がにじんでいた。

「それはイヤだなあ、よし、作戦は南部基地についてから煮詰めよう。今はアオちゃんの集中力をそがないように静かにしてようね。」

「許可も出たから今から降りるよ、もう1度シートベルトの確認し

て、あと荷物は抱えてて。」

葵がそう告げた数秒後に『染赤』はゆっくりと高度を下げ、平原の中に1つだけある大きな建物へと向かい、滑らかに降りて行った。

第38話 着陸成功 ジープに乗ったオヤジ

「4・3・2・1…はい後輪ついた……あ、くそう、…着陸、ふう、シートベルト外していいよ」

途中

「あ、くそう、」と呟いたものの無事着陸を終えた葵が息をついて目をつぶる。

「アオちゃんお疲れ、さあ皆、降りようか。」

アルが荷物を背負いドアに向かう。

「アオ姉おつかれ!!」

「お疲れ様でした」

「……オツカレ」

「はいオツカレサマ、後で合流するから先行つてて」

各々が葵に労い言葉をかけ、葵は言葉を返し染赤を降りる4人を見送った。中央のラインから大分ずれて止まった染赤は2台のトラックに牽引され格納庫に向かう。3人が南部基地に向かい歩いていると1人の男がジープに乗って近付き大きく快活な声で半ば叫ぶように話しかけた。

「いよッス!! 久し振りだな梓!! それにモモ、和秋……とお前は新入りか?」

「本名を呼ぶんじゃないねえ、クソ親父!」

アルは男を睨みつけ噛みつくように言う。

「なんだよ梓、まだ馴れてないのか？それにお前：アルとか呼ばれてるらしいがそのあだ名は逃がした敵につけられたもんだろ？がよ、姿見られてその上逃がしたなんて狙撃者として2流もいいとこだ。お前は白髪たら目の色たら肌の色たら特徴多いんだから気いつける。基地出て街歩けなくなんぞ、そんで『アルビーナ・オッド』なんてどこがいいんだよ。『梓』のほうがよっぽどいいだろうが、なあ新入り！！」

「そうですね…梓は桜に似て綺麗な木ですし梓弓は魔避けに鳴らす弓でその上柔軟で強靱、考えられないいい名前だと思います。アナタが考えたんですか？」

「おおぅ……いや、俺と嫁で考えたんだ…博学だな新入り！気に入った！！！」

早口でまくしたてハルに話をふって返ってきた答えに驚き、その後大笑いした後で親指をたててやはり叫ぶように言った。

第39話 南部基地へ客室へ

5人を乗せたジープは自身のエンジン音に負けない大声での会話を車外に撒き散らしながら基地の外れにある空港から中央近くにある大きな建物に入った、そこは本部基地の作りとはまったく違う建物だった。そっけない感じのある外見とは裏腹に、昼どきの基地内はガヤガヤと賑やかで民間空港のターミナルのような雰囲気のある内部は明るい空気で満たされている。

「ついたぞ新入り！ここが南部基地の居住区だ！！向こうの食堂で飯も食えるしその売店で買いモノもできる。本部より広いだろ！端に客用の部屋があつから使えよ！！後で行くから鍵は開けといてくれ！んじゃな！！」

アルの父親、勇護は部屋の鍵を開けておくように言い、答えを聞かず居住区の端を指差し自分はエレベーターに向かい大股で歩いて行った。途中何人かと言葉をかわし大笑いをしていた。

「勇護さん、相変わらず人の話聞かない人だねえ……」

モモはアルの肩に手を置いて慰めるように言う。

「ほんつとになあ、相変わらずうるさいし……1日だけでもどうにかならんもんかねえ、まあ無理だろうけど……ハハハ」

アルは諦めたように溜め息をつきながら乾いた笑い声をあげた。

「でも明るくていい人じゃないですか、それに聞いていないようで大事なコトはちゃんと聞いてます、知識も深くて好感が持てますよ。

僕はアルさんが羨ましい。」

ハルが本心から言う。

「勇おじさんは優しい…それより部屋行こう。疲れた。」

和秋はそう言うのと台車を押して居住区の端にある客室向かって歩く。ハルは頷いて、アルは首を傾げ、モモは微笑み、和秋の後についてゆつくりと歩いた。

第40話 決意

（客室）

4人が客室に入って3時間、いかにもゲストルームといった感じの落ち着いた内装の部屋の中では作戦会議が開かれていた。

「よし、じゃあ動きは後で各自で確認ね。で、ハル君、今更だけど接近戦でサイレンサーつけた拳銃使って手もあるけど……ホントにナイフでいいの？」

アルはナイフを使う事で手に強く残る『殺した』という感覚に実戦経験の少ないハルが耐える事ができるか心配して言った。それは、和秋もモモ口には出さなかったが内心、不安に思っていた事だった。

その問いにハルはアルの眼をしつかりと見て言う。

「はい、責任から逃げちゃいけませんから。それにこの血で染まった髪を切ってないのも、僕の決意です。自己満足かも知れないけど、……背負って生きようって」

アルの眼帯で隠れていない蒼い瞳に映るハルの顔には強い決意が伺えた。その決意に3人が押し黙り壁掛けの時計が秒針を動かして自己主張する音がハッキリと聞こえる静寂が続く。

その時、扉が勢いよく開き

「オッス！ウツス！お疲れさん！！食いモン買って来たから食べ！！！」

場の空気に全くそぐわない大声でアルの父親こと勇護が飛び込んで来た。4人は驚いて扉の方に視線を向けた。

「……………空気読めよクソ親父……」

心底嫌そうな顔をしてアルが呟くように言う。

「お、怒ってるなクソ息子よ！！そんな時は甘いモン食べ！！ほら、ケーキ、紅茶もあるぞ、和むぞ！！皆適当に取って食べえ！！」

勇護は息子の嫌そうな顔を無視して手に持っていた大きな袋から紙の箱とペットボトルの紅茶を取り出した。

「わあ、ありがとうございます勇護さん。僕、カップとお皿とフォーク持って来ます。」

ハルは重くなつた空気が散つた事を感謝して立ち上がった。

「あ…、私も行くよ、5人分は多いし場所ハッキリわかんないですよ？」

「あ、すみません。お願いします。」

モモの声に振り返ったハルの表情はムリをした硬い笑顔だった。

第41話 トラウマ

WPM本部には本部、支部を併せた全隊員の病歴、性格、実績などのデータが管理されている。勇護はプリントアウトされたデータを見ながら言った。

「で、結局ナイフにしたのか……大丈夫なんか？新入りのデータ見る限り向いてねえぞ？見てみるコレ」

「ああ、決意なんだ！ってさ。ムリしてなきゃいいけど……ん？何コレ」

「……寂しそうな眼だったよ、ハル。……ん？何ソレ？」

ハルとモモがキッチンに向かった後、リビングに残された3人はソファーに座り新入りのハルについて話し合っていた。アルと和秋は勇護の持っている紙を受け取った。

「……親父……コレ……個人データ……!？」

「え……個人データ……!？まさか……流用……?」

「流用!? 厳罰モンじゃん!! 気になるからってそりゃダメだろ!? 本部に引っ張ってかれるぞ!? おっちゃんは親父を本部に置いときたいんだろ!!?」

「厳罰!!?? 厳罰……… 厳罰コワイ 厳罰コワイ 厳罰コワイ……
……違うんだ…… オッサン…… 違う違…… ああ………」

「！？勇おじさん！？大丈夫！！？」

「親父！！？オイ！どうした！？」

『厳罰』と言う言葉を聞いた勇護はいきなり体を丸めて震え出した。2人は勇護の態度の変化に戸惑い、立ち上がって勇護の隣に駆け寄った。

「オイ！オイって！！クソ！！！！目え覚ませクソ親父！！！！ッセイ！！！！」

アルは掛け声と共に勇護の頬を平手で張り倒した。

「……………ハッ！！？ 流用流用言うんじゃねえ！！厳罰ってあとセリフが何はあっても俺が前で言うな！！頼むから！！ホント頼むから！！コレはちゃんとオツサンに頼んだ送って貰ったんだよ！！言い忘れてたけどな、今回は特別に任務サポーターが南からついた、それが俺だよ！！！！よろしくネ！！！！！！」

アルの張り手でソファーに倒れ込んだ勇護は正気を取り戻してにをはが怪しいセリフを声高に叫んだ。語尾も若干おかしい。

「……………昔何があっただよ……………」

「聞かない方がよさそうだな……………」

アルと和秋はひきつった笑みを浮かべて顔を見合わせた。

第42話 ギツシリ詰まった食器棚

アルと和秋が錯乱した勇護に戸惑っている頃、キッチンでは平和な時間が流れていた。

「ねーハル君、この皿オシャレじゃない？」

「そうですね、シンプルだけど上品な感じがします。」

食器棚の中に必要以上に大量に収まっている皿の中からモモは使う皿を、瞳を輝かせながら選んでいる。ハルは話かけられる度に微笑みながら自分の意見を言っていた。

「……………ねえハル君？今さらだけどさっきからずっと敬語だねえ？」

「あ、すみま…っと……………ごめん、モモさん。まだ馴れなくて」

「よし、けどさあ……………さん付けも嫌なんだよねえ…それもどうにかなんない？」

「いや…流石に呼び捨てにするわけにもいかないし…」

ハルは少し困った顔で言葉を濁す。

「じゃあさ、さん付け以外で好きなのでいいよ。…あ、ちょい待ち……………ねえ…変な声しない？」

モモはリビングでの騒ぎ声に気付き眉をひそめた。

「…あ、ホントだ、なんだろう？」

「行ってみよ、ハル君、コップ頼める？」

「うん」

2人はリビングに小走りで向かう。

「ねえ変な音したけど、どうしたの？」

「なんか敵罰がどうか聞こえたけど……」

リビングでの騒がしい声にハルとモモは首を傾げながらキッチンから出てきて、部屋を出ていく前と変わっていた3人の位置にさらに首を傾げた。ハルの手にはコップが5つ、両手で挟むように少しムリをして持たれ、モモの手には皿とフォークが5つ持たれていた。その極日常的な姿で先程リビングで起こった騒ぎとは全く関係の無い所に居た事がよくわかる。

アルは呆れたように頭を左右に振りながらどう説明したものかと言葉を詰まらせた。

「ああ…モモにハル君……いやね……親父が…何て言うかその…錯乱して……」

うつ向いて目を閉じ、十数秒じつくりと考えた後、やっとそう言うアルはソファに倒れたままの勇護をちらりと見た。

第43話 時間はただ穏やかに

「厳罰コワイ厳罰コワイ……………」

そこにはハルの言葉に反応して錯乱し、丸まって震える勇護がいた。ハルとモモは何が起こったか理解できず目を丸くしている。

「はあ…またかよ…ツセイ!!!」

その姿をみたアルはあからさまなため息の後に脚を大きく振り上げ、踵落としを見舞った。

「へぶつ!？」

勇護はアルの踵が脇腹に入り情けない声をあげて気を失った。静かになった室内に、庭で歌うようにさえずる鳥の声が響いた。

「まあ…………こんな感じだったんだ…わかった？」

「…………昔勇護さんに何があったのよ…？」

「…………昔勇護さんに何があったんですか…………？」

2人はかなりいぶかし気な顔で当然の疑問をほぼ同時に呟いた。

「さあねえ、俺は知らないよ…………まあ…聞かない方がいいんじゃない?」

「聞こうとしたらこんなことになるからムリだよ、聞けない。」

「まあいつか、皆、こんなオッサンほつといてケーキ食べよう」

「…そだね、丈夫な人だから大丈夫だよな。」

「たしかに勇護さんは丈夫そうですね。いいんですか？」

「息は……してるね。大丈夫。先に食べてよう。話さなきゃなんないことあるし」

「そだね、3人共好きな取んな」

薄いレースのカーテンから漏れでる暖かな光を浴びながら気絶し続ける勇護を放置して4人はケーキを食べだした。

「ええ！！？今回のサポーターが勇護さん！？」

「そうらしいんだ、てゆうかモモ、こんなに騒いだ後でよく驚けるね？まあ詳しくは親父が目を覚ましてから話して貰おう。」

4人の内モモは1人だけ驚いて声をあげた。ハルはサポーターについて詳しくは知らないらしい。フォークをくわえて首を傾げる。アールはというとモモの反応にも落ち着いてケーキを食べ続けていた。隣では今回のサポーターがまだ情けなく気を失って、時折悪夢をみているようなうめき声をあげている。

その後、時間は穏やかに過ぎて行った。

第44話 去った親父と来たメール

結局勇護が目を覚ましたのは4人がケーキを食べ終え暇を持て余し始めた頃だった。アルの華麗な踵落としが決まった方の脇腹を手で押さえ

「後でそのパソコンにメール送つとくから見といてくれ」と言つてフラフラと去って行った。その顔はかなり憔悴していた。開いた扉が勇護を隠しきる寸前に

「威厳が…」と言つ悲しげな呟きが聞こえた。

「モモ、パソコンに電源いれといて、ところで……大丈夫なのか……あのオヤジがサポーターで……」

「明日までショックを引つ張つてなきや大丈夫よ……多分……」

「不安だね……」

「不安ですね……」

唯一不安を感じていなかったハルも3人にサポーターについての説明を聞き、不安を感じだしたようだ。その時、

『ピ。ピ。ピ。ピ。 ピ。ピ。ピ。ピ。 ピ。ピ。ピ。ピ。』

つい数分前に電源を入れられ低い唸りをあげていたパソコンが軽い電子音をあげた。

「あ、メール……あんだだけ疲れてたにしては早すぎない？」

アルは疲れからかいつもより物事に不信感を抱きやすくなっているらしい。

「ホントだ、早いね。開けるよ、え〜と……………」明日のサポートは勇くんと私ですからヨロシクネ。内容は基本的には状況を無線で連絡すること、有事の際の狙撃の2つだけです。』だって」

「あゝ母さんか……………」

「あ…アル、まだあった。『追伸、勇くんがなんか落ち込んでるけど心当たりがあるなら私の部屋に來なさい、久し振りだけど逃げたらどうなるかは覚えてますか?』だってさ、ねえ……………コレってもしかして……………」

モモが油のきれた機械の様な動きでゆっくりと振り向くと

「ヤバい…ヤバいヤバいヤバい!!どうしようモモ!!」

第45話　あくまでも『見た目は』

そこには父親に負けず劣らず取り乱しているアルの姿があった。頬を汗が一筋流れ、目の焦点がさだまっていなかった。

「ななな…なに怖がつてんのよ！だ…大丈夫！！かなたサン優しいじゃん！！早く行つてきなさい！」

「早く行かなくちゃかなたさんがコツチに来るよ！？」

モモは

「大丈夫」と言いながらもかなり焦つて、和秋はいつもの落ち着いた静かな喋り方ではなく早口で言った。

「……………こうなつたら…」

アルは小さな声でそう呟くと窓をキツと睨んだ、窓の外では休憩中の隊員がベンチに座り世間話をしていた。焦りなど無縁な場所にあるとても平和な風景だ。アルはその平和な世界への逃避の為に歩き出した。

後、一步。後一步で自由な世界に行ける。問題を棚上げにして希望に満ちた足取りで窓に向かい歩き、たどり着いた。意気揚々と窓を開くアル、しかし窓を開けた瞬間、その顔は絶望に染まった。

「外に出ちゃったら私の部屋に来れないんじゃないかな？」

そう言いながら開いた窓から部屋に入つて来た女性はアルの服の襟首を掴んで3人に向き直つて

「借りて行くね」

と綺麗な笑顔で言うところアルを半ば引きずる様に扉に向かって歩き部屋を出ていった。その間アルは一言も喋る事ができなかった。

「……あの人があなたさん？」

扉が静かに閉まる音が嫌に大きく不気味に響いた部屋の中でハルは誰にともなく質問をした。

「……そうだよ……　　優しそうな人でしょ……？怒ったらコワイんだよ、意外でしょ？」

その質問にモモが若干虚ろな感じの声で答えた。優しそうな人と言う前の間に

「見た目は」と聞こえた気がした。確かにあなたは優しそうな外見をしていた。見た感じは線が細そうな外見で華奢で身長は低い、瞳は大きく透き通っていて長い髪は風が吹けば美しくなびくし、肌の色も白い。

ただ底知れない何かを感じる。

結局、アルは3時間程後になって戻って来たがその目には涙がたまっていた。

第46話 誤解です、お母さん。

翌日～早朝～

「起きて！緊急事態！！」

昇りきっていない朝日が弱々しくも力強い光を放つほの暗い早朝に、予定よりもかなり早い時間に4人が眠る客室にかなたがノックもせず飛び込んで来た。切迫した表情でアルのベッドに駆け寄ると掛布団を掴んで放り投げる。

「ん……」

そこにはアルとモモが丸くなって眠っていた。かなたは目をしばたかせて数秒固まった後でアルの胸ぐらを掴んで引き起こし

「モモちゃんに何してんの！！」

と大声で叫んびながら引き起こされた時点で目を覚ましていたアルが何か喋ろうとしているのを無視して力強い張り手を頬に叩き込んだ。その後かなたは

「何もしてない」

「誤解だ」

「モモが勝手に入って来たんだ」

「どうしてこんな早くに母さんがココにいの？」と言っアルの言葉が無視し続けた。

他の3人が目を覚ましてかなたをやっこの思いで止めたその時

「かなた！早く！！」

そう叫びながら大きな台車を押して勇護が部屋に入って来た。勇護は馬乗りになって息子の悪戯を怒っている感じの妻とその妻を3人がかりでとめている同じ部隊の仲間、という早朝の不思議な風景を華麗にスルーして部屋に入ると4人の荷物を集めた。

「緊急事態だ！標的が　　ッ詳細は飛行機の中で話す！！飯は機内だ、今すぐ3番ゲートに集合！」

と言うと集めた荷物と息子から引き剥がしたかなたをを台車に乗せ走り去って行った。

4人は大急ぎで服を着替えると黒いブーツを履いて装備とは別に枕元に置いてあった拳銃をホルスターに入れ、予想外の事態に早朝から慌ただしく動き始めた基地の中を空港の3番ゲートに向かって走り出した。

第47話 焦りと苛立ち

「あ、来た！乗って！！もう飛べるから！早く！！」

エンジンがかかったままになった染赤の隣で葵が叫んでいる。

「荷物は？」

駆け寄ったアルが尋ねる。

「もう勇護さんが全部積んだ、それより早く乗って」

葵は『緊急事態』の詳細を知っているのだろう、かなり焦ってそれだけ言々と自分は操縦席につき管制塔と連絡を取り出した。4人が染赤に乗り込む。

「管制塔、こちらH E・染赤。いつでも飛べる！」

葵が無線機にむかい叫んだ、連絡した先から返事が返ってきた、無線から声がもれる、かなり大きな声で喋っているらしい。

「こちら管制塔！S・F・染赤、S・F・散香、共に移動終了している、ランに支障はない、飛べ！」

「了解！」

葵がスロットルを押し上げると今まで暖気されていた染赤のエンジンは一気にふきあがり染赤を前に押し出しスピードをあげる。

「テイクオフ、行ってくるわ」

「幸運を祈る。早く戻って来いよ。」

唸りをあげながら高度を上げる機体の中であなたが4人に食事を手渡し勇護が荷物から任務地の模型を引っ張り出した。

「敵の拠点がココだ、」

勇護がヘルメットに『E』と彫られた小さな人形を3体、一回り小さい人形を1体、模型の端に無造作に放る。

「で、運の悪いことに深夜に人数が増えた。ザッと100だ、今までのと合わせると約135。人数が揃う前に落としたかったんだが……早くしないと同盟国にケンカふっかけられるんだ。」

そう言う人と人形を模型の下引き出し部分から10体取り出してまた無造作に放った。普段はひょうひょうとしている勇護の動作に苛立ちが感じられた。

第48話 作戦概要

「だけど基本的にやることは変わらないの、アナタ達は作戦通り気づかれないように敵戦力を徐々に削る、これでいいわ。注意しなくちゃいけないのが予想外に出てきちゃった敵の飛行機、旧式だけど爆弾なんて落とされたらひとたまりもない……」

かなたがヘルメットにWPMと彫られた人形を優しく置きながら言った。

「で、あいつらの出番だ、俺達が戦力を削っていけばいつかはバレル、そうすれば敵も飛行機を飛ばして俺達を消しにかかる、その戦闘機を後から飛び立つあいつらになるべく引き離して撃ち落とす！！名前はこの任務が終わったら自分で聞いてくれ、あいつらなら絶対に死ななから。」

模型を移動させながら任務を説明し終えた勇護は

「ほんじゃ、各自で準備してくれ。」と言うと自分のバックパックスの中身を確かめた。

「6人で……135、ですか……」

「……多いね……一人頭21だね……」

「多いなあ……あゝコーヒー飲みたい……」

「……はあ……呑気でいいね……」

口々に不満の言葉をこぼしながら勇護に倣ってバックパックの中身

を確認する。

時々、染赤の中に置いてある大きな木箱に無造作に入っている弾丸やピンがしつかりとビニールテープで止められた手榴弾をバツクパツクに移す。弾丸には普通の弾丸と先端が赤や青に着色されているものがあつた。

「さつき『H E・染赤』とか『S・F染赤』『S・F散香』
って言つてたけどH EとかS・Fとか、どういう意味なんですか？」

ふとハルが荷物確認の手を止めて疑問を口にする。

「そつか、ハルはまだ知らないんだっけ…H Eは本部って意味でS・Fは南部基地のファイター、所属と戦闘タイプなんだ、ファイターとかアタッカーとか、区別の仕方は…つと、これはまた今度。」

和秋が珍しくなめらかに話す。

「へ…所属と戦闘タイプ…和秋、詳しいんだね」

「バカ姉が飛行機乗りだから」

「そつか、葵さんの弟なんだ…大変だね…？」

「…うん、大変だね。あ、迫られたら張り倒していいから」

「迫られッ！？…ってどんなふうに…？」

「聞きたい？」

「あ…いい、また今度」

「賢明だね」

少し笑いあつてまた荷物に目を落とした。その時、操縦席では葵が小さな声で

「聞こえてるからね」と言っていた。その声は誰にも聞こえない。

第49話 着陸と発砲音

「皆、降りるよ。これ以上近づいたらバレる。てゆうか森に入って降りれなくなる」

「ああ、わかった。」

短い会話を交して徐々に高度を下げる。遠くの森にカモフラージュされた建物が見えた。

「分かってたけど結構遠くに降りるんだね……」

「それはしょうがないわよ、それよりアル、着陸したらコレ染赤に被せてね」

「カモフラ？」

「そう、念のためにね。急だったからただのグリーンシートだけど、無いよりマシだしね」

「おい、もう着陸するよ、低高度だったからいつもより早いよ、舌噛むから喋らないようにね……3……2……1……タッチダウン……
…はい止まった。基地に連絡入れるから先降りてて」

「了解」

葵以外の全員が染赤から降りてカモフラージュ用のシートを準備し
だした。

「終わったよ、シート被せて」

連絡を終えた葵がステップを降りながら言った。

「あいよ、俺が上登るから投げてくれ」

「わかった」

勇護は染赤に梯を立掛け、登る。アルは畳んだままのシートを勇護に投げた。勇護はシートを開けると端を持って下に居たアルとハルに投げ落とした。それを広げて固定するまでに1分とかからなかった。

「おー、やっぱり速いね特殊部隊。」

「んなこたぁいいから、バイクは？」

「今から出すよ、ハル君手伝って？」

「あ、はい」

任務地に向かう為の足を用意するために葵に駆け寄るハルを心配気に見送る和秋、少し迷って自分もバイクを出しに行くコトに決めた。その時、乾いた発砲音が辺りに響いた。

第50話 被弾、撃退。

「ッ！！？」

その場にいた全員が身近な物を遮蔽物代わりにして身を隠し、ハルはスナイパーライフルをハル以外の全員が拳銃を手にする。

アルと勇護はマガジンをグリップから落としそれぞれ薄いピンクと鉛色のマガジンを装填した。アルは眼帯を外している。

モモは左手をバックパックに手を入れ円形の機械を取り出す。

「和秋！！」

勇護が叫ぶ。

「分かつてる！！5時の方向！おそらく1〜3人！負傷無し、9 m弾のただのハンドガン。確認頼む！」

その声に対して和明は敵の方向、人数、武器のおおまかな情報を伝える。

「モモちゃん！！」

かなたがモモに声をかける

「2人！！」

モモは手に持ったアクティブソーナーで正確な人数を伝える。

「かなた！！チャフ」

「もう投げた！」

地上15m程の位置でくぐもった比較的小さな爆発音が短く響くとキラキラと光る薄い金属片が辺りに舞った。

森から乾いた発砲音が響く。

迷彩服を着た人間が2人飛び出してきた。飛び出した後の慌てた動作にも身長にも幼さが感じられた。

「梓！撃て！！」

「あいよッ！！！！」

2発分の発砲音が響き幼い（？）2人はその場に力無く倒れた。ハルが沈痛な表情でうつ向く。

「っあゝ……緊張したあ……私こういうの苦手なんだよね」

葵が拳銃を腰のホルスターに戻しながら森の木の影からスッと出て来た。倒れた2人に近づく。

「ハル君、縄取って。木箱の端に架ってるから。あと弾入ってる袋も、麻袋、おんなじトコにあるから。」

「わかりました。けど縄なんて何に使うんですか？」

「この子ら縛んの、ちなみに趣味じゃないよ」

葵は倒れた2人の襟首を無造作に掴むと引きずりながら染赤に向かい歩く。やはり2人共幼い。

「え…？その子達をですか！？」

ハルは驚いた。死体を縛るコトになんの意味があるか理解出来ない。

「そそ、ギュツと縛ってグイツて。ハル君勘違いしてるかもだけど…生きてるよ？」

「…え？」

第51話 知ってるか？

葵にそう指摘されて注意して見ると胸が静かに上下している上に弾丸が当たった額からは血が流れず青痣が出来ているだけだ。

「……………眠って………？あ、アルさん、縄」

「そう、情報も出来るだけ手荒な方法を使わずに欲しいしこんだけ離れてたらしかしたら今回の標的じゃないかもしれない。お、サンキュー。それに、もし今回の標的じゃないなら俺達を狙った理由も知りたいしね。さて……………」

そう言うのと眼帯を着け直したアルは手早く2人を縛りあげた。正座で手を後ろに回された状態で手足をがっちり固定させている縄は芯に細い鋼鉄のワイヤーが入っている丈夫な物で、道具を使わなければ人間の力で切ることはまず不可能だ。

「よっし！起こすか、和秋、その辺に倒れてて、交渉がしやすいから。アオちゃん、和秋の上脱がせて包帯をなんかで赤くして巻いて、モモ、水ちょうだい」

「オツケーー！！任せて！！！！」

「嫌な役……………アルめ……覚えとけよ……」

「はい、無駄使いしないでね」

「ん。サンキュー、」

アルは和秋に倒れるように指示すると縛りあげた幼い2人の内歳上と思われる方の頭から服を濡らさないように気を付けながら水を被せた。

「……………ん……………うう……………」

水を被った少年は焦点の定まらない虚ろな目で自分達を撃った張本人を不思議そうに見つめる。

「やあ少年、おはよう。気分はどう？」

「……………ん……………怒りに……………燃える……………高……………潔な……………蛇を知、って……………るか……………」

アルのフレンドリーな問いかけに寝惚けた幼い少年は半分寝言のような小さな声で質問をしてきた。意味の分からない質問をしたあと少年は、また眠そうに黙り込んだ。

第52話

『The third root』

「蛇い？なんのこつちゃ……寝言……じゃねえよな？」

勇護がマガジンを戦闘が始まる前のモノに戻しながらあからさまに眉根を寄せる。

「ん……あ、合い言葉だ！ほら、合流隊に変なのが混ざらないように――！」

かなたは気が付いた、と言うように勇護を指差し誇らし気に言う。

「そういえば増援来たんだったね、母さん今日は冴えてるねえ、どうしちゃったの」

「んふふふ」

アルの取り方によつてはイヤミに聞こえなくもない言葉に軽やかに微笑んで胸をはる。元々若く見えるが誇らし気にしている姿は幼ささえ感じる。

「で？どういう意味？」

一応の期待を込めてアルが尋ねる。

「……ん？……ふ……ふふ……専門外……」

「……うんまあ……そんなコトだろうと思ってたよ……とにかく！合い言葉解読の専門家なんて居ないんだから早く皆で答え見付けなきゃ」

皆普段と変わらない口調で会話するが表情が微妙にかたい。眠っている少年達が目を覚ます前に合い言葉の答えを見つけ出さなければいきなり撃つて来るような相手に情報を平和的に聞き出すコトが出来ないからだ。

「……………なああなた、今回の敵の名前は？」

「ん？大元は『ユグドラシル』、で、今回の敵は分隊みたいな感じの『The third root』、つまり『第三の根』って意味ね、よくわかんない名前よねえ？」

「『ユグドラシル』……………『第三の根』……………？またそんなよく分かんない名前つけて…合い言葉のヒントになんないのかな…」

アルがうつ向いて蒼い右目の上につけられた眼帯を人差し指でコツコツと叩く。考える時の癖らしい。

「あの、勇護さん、かなたさん、アルさん。もしかしたらですけどハルが3人に向かってそこまで言った時

「おい！おまえたち何者だ！！弟になにした！？」

眠っていた少年が完全に目を覚ました。

第53話 『ニーズヘッグ』

「大丈夫、寝てるだけだよ。コレ、睡眠弾。ヒュブノスブレットよ。私達の仲間は少し危険な状態だけど……アナタのお名前聞いていいかな？なんで私達を襲ったの？」

いきなり叫んだ少年に動じずになたが勇護が銃から取り出したマガジンを受け取り、少年に見せながら怒りを含んだ声を作って話かける。

「……怒りに燃える高潔な蛇を知ってるか！！？」

少年はかなたの問いかけを無視して合い言葉だろうと思われる言葉を口にする。隣にいる自分より幼い少年が眠っているだけと分かっても少年は怒る事をやめない。

「ふざけるな！！アイツを見る！！俺の弟だ！！もうダメかも知れないんだ！言え！くだらない理由なら2人共撃ち殺してやる！！」

アルが普段聞いた事の無い激しい口調で縛られて動けない少年に詰め寄る。上着を脱がされて腹部に赤く着色された包帯を巻いて倒れた和秋を左手で指差し弟だと主張している。右手にはハンドガンが握りしめられていた。演技だとは思えない程の怒りを感じる。

「……！怒りに燃える高潔な蛇を知ってるか！！？」

少年は『俺の弟だ』『撃ち殺してやる』と聞いた時、確かな動揺を示したが合い言葉を繰り返す。

10数秒の沈黙の後、少年がアル達を睨みつけもう一度繰り返す。
アルが少年に見える位置で右手のハンドガンに初弾を手動で装填した。

「もう一度だけ言う！怒りに燃える高潔な蛇を知ってるか！？」

時間稼ぎともとれるタイミングで少年が3回目の合い言葉を言う。
ハルが静かに少年に向かい、動いた。

「…………『ニーズヘッグ』。ねえ…僕達は敵じゃ無いんだ。全部君の勘違い…………君達の名前、教えてくれる？」

第54話 蜷川春樹

「…え……合い言葉……？……仲間……なの！？」

『ニーズヘッグ』と言う言葉を聞いた少年はアル達を睨みつけていた目を丸くした。怒りで激しかった口調も幼くなる。

「お前ら……『third root』の人間なのか！？ならなんで撃った！」

アルがさも合い言葉を知っていた風に話を合わせ怒っている演技を続けながら少年に詰め寄り胸ぐらを掴み問い詰める。

「ひッ！！？ごめんなさい！お父さんにこの辺で武器持つてる人は敵だから攻撃しても構わないって言われたから……」

少年は敵だと思っていた人間が仲間だった事に安堵し、同時に仲間を攻撃した罪悪感を感じている。安堵感から口が軽くなり少なくとも死に対する恐怖が消えた事でアルに対して恐怖を覚えていた。

「アル、離しなさい。私達は仲間よ、そしてそこで倒れてるあの子も仲間。……ねえ私達本隊に合流したいの、作戦はまだ始まってないよね？あ、その前に、アナタのお名前は？」

アルは怒ってではなく演技で小さく舌打ちして手を離れた。

「春樹、蜷川春樹です……弟は慎吾……」

春樹と名乗った少年は目に涙を溜め声を震わせている。

「ゴメンね、怖がらないで。春樹君。私は八坂かなたっていうの。で、さつきから黙ってるのが八坂勇護、怒鳴ってるのが八坂梓、そこで倒れてるのが八坂和秋、で、介抱してるのが泉百恵、合い言葉を言った彼は柊陽菜、本名だよ。アナタ達は仲間だから。よろしくね。あ、あと和秋は大丈夫。傷は浅かったから、梓が大袈裟に言っちゃってゴメンね?」

かなたは和秋の苗字だけを偽って自己紹介をした。本名を教える事で親近感を湧かせ、自分が撃った人間の傷が浅かった事を知らせ安心させ、自分達を完全に『仲間』として認識させようとしている。

第55話 質問

「あの……よろしく……お願いします。」

春樹がおずおずと挨拶を返す。

「さて、自己紹介も済んだし……教えてくれる？今本隊はどこ？もう出発したの？あ、それと無理に敬語にしないでいいから。」

「……はい……まだ拠点に居るはずです。たしか11時に『香南』に着くようにって聞いたから9時くらいに出発だと思います。」

「今は……7時30分が……急がないと……」

今まで黙って倒れていた和秋が横になったまま左手の腕時計を確認して言った。右手で腹部を押さえている。

「和明！もう大丈夫なの？」

「うん……なんとか大丈夫そうだよ、『母さん』。」

一息ついてフラフラと立ち上がり春樹に近付く。春樹は脅えて少し体を硬くしたが安心感が勝っているらしく表情に安堵がうかがえる。

「話は聞いてたよ、春樹君。僕達は急ぐからもう行くけど最後に聞かせてくれない？……君達の親は……もしかして実の親じゃない、それに君達は銃を撃つ訓練をろくにしてない、違う？」

春樹の目の前に移動した和秋がきつく結ばれた縄をほどきながら静

かに聞いた。

「!?!?.....なんでそれを？」

春樹は目を見開いて和秋を見つめる。その目を真っ直ぐに見て2つ目の質問をした

「実の親なら、ろくに訓練をうけてない子供に敵を殺せなんて言わない、逃げろって言う。ねえ、今まで育ててくれた人や『their d r o o t』の人は大事？」

「...あの人達は人殺しだ。それに...僕らは...虐待されてた...それに捨てられた。行く当てもないんだ...だから...大事では...無い...」

悲しそうに縄のほどかれた手で膝を抱える。

「そうか、行く当てが無いならいいとこ紹介してやる。ココでじつとしてりゃあ俺らの仲間が来る、そいつらにお前らのコト伝えといてやるからそいつらに頼れ。また俺らの基地で会おう。」

勇護が座りこんだ春樹の肩に手を置いて力強く言った。眼には涙が溜まり声は震えている。

あっけにとられた春樹はただポカンとした顔で勇護やその周りにいるかなたや和秋、アルを見上げている。

「俺達はもう行くから、後は自分達で考えて、自分達で決めるんだ。じゃあな」

アルはまだ眠っていた慎吾を縛っていた縄をほどくと木の根元に放りながら言つとバイクに歩み寄ってエンジンをかけた。

第56話 眉間のシワが戻らない……

「っあー！！あの顔と口調！疲れたー！！やっぱり普段と違うようにって神経使うねえ、ねえハル君？」

春樹と慎吾と別れて1分程して2人の姿が見えなくなった時、アルが左手で自分の頬を軽く引っぱりながらサイドカーに乗ったハルに声をかけた。

「そうですね、皆は普段通りの口調だったから大丈夫だったけどアルさんは大分キャラ作ってたから……お疲れさまでした。」

「普段があんなだからね、倒れたまま聞いてて笑いそうになったよ」
ハルが労う様な笑みを浮かべながら言ったのに対して後ろのシートに座った和秋は舌を出して両手を上げて降参のポーズをする。

「るせえ、倒れてただけのヤツにやあ分かんないよ。それに…ほれ、親父見てみ？」

指差した先には勇護が運転するバイクがある。サイドカーにはモモが後ろにはかなたが乗っている。

「…？別にいつもと変わらないけど？」

和秋はいぶかし気に言う。

「その位置からは見えないか……よし、この位置から見てみ、」

少し加速して前に出る

「……………」

無言でバイクを運転する勇護は左手で眉間をマッサージするように揉んでいた。

「な？眉間のシワが戻らなくなってる、親父は普段あんなだからなあ……ま、普段と違うことするってのは難しいって事だよ。」

「アル、あとどのくらいで着くの？」

和秋が露骨に話題を変える。

「……………親父はいいのかよ……まあ別にいいけどさ……到着はまだだよ、40分はかかる。向こうでは時間も無いし打ち合わせしとく？」

「大丈夫、ちゃんと覚えてる。それに打ち合わせは全員でしないとあんまり意味ないしね。それより……あの2人大丈夫なのかな……………」
和秋が不安そうに眉を下げた。

第57話 ……繋がらない

「あー…大丈夫なんじゃない？すっかりしてたし、アオちゃん残ってるし、後で南のパイロットも2人来るし。完璧だよ、非のうちどころがない」

「忘れてた、今心配事が1つ増えたよ…」

軽い口調でアルが返した安心させようと言った言葉が違う種類の不安を和秋に与えたようだ。

「…大丈夫だよ、和秋、葵さんも時と場合をわきまえ…てくれたらいいね…」

和秋の不安の原因を察したハルが励まそうとするが早朝の出発の時に初対面の自分に言いよった女性を思い出して単なる希望として終わってしまった。それがさらに不安を煽る。

「葵が犯罪者…ありうる…どうしよう…不安だ…」

「…そうだ！無線いれてみれば！？」

小さな声で呟くように言う和秋にハルが提案した。

「それだ！さすがハル！アル、チャンネル教えて！今すぐ連絡する！！」

「あいよ、え〜と確か…112…7だったかな、てゆうかアオちゃん無線切ってたりにして」

「いくらなんでもそれは無いですよ、任務中な

「…ねえ…2人とも…？え…？嘘だよね…繋がらない…どうしよう…」

アルが笑いながら言った冗談にハルが楽観的、と言うより当たり前の意見を笑いながら言おうとしたが和秋が青い顔で言葉を被せた。3人の会話が止まり全員の顔がひきつり青白くなった。

「……少年よ…お姉さんを信じなさい」

短い沈黙の後、アルがそう言った。その後無言で時間は過ぎ、整備されていない森の悪路を走るサイレンサーを通して小さくなったバイクのエンジン音だけが静かに響いていた。

第58話 忘れ物

無線での通信に失敗して無言で走ること約30分、アルがバイクを止め双眼鏡を覗いた。

獣道に木が少なくなりだし道も一応、と言った感じではあるが草が抜かれ土を固めた道になっていた。木々の間から600m程向こうに緑に塗られた2階建ての建物が見える、中心に何があるかは見えないが、円形で、屋上には機関銃が据え付けられていて建物の周り200mは円形に木が伐採され遮蔽物が何も無く所々に塹壕が掘られている。

「ふー…大体この辺だね、親父達はもう配置についてるだろうから俺達も急ごう。行くよハル君、和秋また後で。モモをヨロシク」

バイクのエンジンを切ってアルが2人に話しかけた。森に響いていた小さな反響音が消え、代わりに森特有の木のざわめきが聞こえる。

「わかった、任せといて。そっちもしっかりね。ハル、アルをヨロシク」

和秋はサイドカーに積んだ荷物を降ろして背負いながら言った。和秋が手に持った荷物は細長くとても大きい。

「……俺…一応この中で一番先輩なんだけど…」

「そうだったね、ごめん。じゃあアルをヨロシクね、ハル。待たしちゃ悪いしもう行くよ」

アルは和秋の言葉に不満を口にした。それに対して和秋は自分の荷

物を全て持ちアルに謝った後、もう一度ハルに声をかけて走り始めた。

「ワザとだなあんにやるー……まあいいや、帰ってからシメる。行こうハル君」

そう言うアルは苦々しい顔とも笑顔とも取れる顔で歩き出した。

「うん、 あれ？…これ…」

ハルが後部座席に吊り上げた自分の装備を詰めた鞆を手を取った時、サイドカーの出っ張りに引っ掛かった分厚いペンダントを見つけた。銀で造られたそれはシンプルで、どこことなくそっけなく、そして美しい。

「おーいハル君、どったの？」

「あ、ごめん。なんでもない」

なんとなく手にとってペンダントを眺めていたハルはアルに声をかけられ半ば反射的に何も入れていない胸ポケットに入れた。

第59話 行こう。

走り始めて数分、2人は木の残っているギリギリまで近づいた。木の上に登り、アルは双眼鏡を取り出して遠くを、ハルは近くを見て敵の存在を確認する。

その時、建物の近くの塹壕の土が少し盛り上がり、そして開いた。

「…うわ！地下から出てきた！？」

アルが双眼鏡を覗きながら小声で驚き、同時に無線機のスイッチを押して状況を説明する。

「敵を視認。人数4人、建物から約5mの位置、塹壕には普通地下から入るのか…巡回し始めた。…塹壕は所々繋がってる。建物からの監視は無し。以上。」

「了解。こっちも確認した。狙いつけとくから安心して」

「私たちはもうすぐ潜入出来るから連絡待ってて、通信終わり」

アルは通信を終えた無線機から手を離し小さく溜め息をついた。

「…俺達も行くしか無いか…いい？ハル君」

「はい！行きましょう！」

アルが敵の存在を確認して一番近い塹壕まで走り、飛び込んだ。

「うわ！？思ったより深いな…ハル君、大丈夫だった？」

「はい、けど…上の様子は分かりません……」

ハルが少し悲しそうに言った。塹壕の深さは約1・5m、平均かそれ以上の身長の大人が屈めば敵からは見えず中からの視界を損ねない高さに掘られている、しかしハルにとっては高すぎるらしく背伸びしても頭の先も出ない。

「あー……背なんてすぐ伸びるよ……」

背が高いアルが頭が塹壕からはみださない用にしゃがんで、直立しているハルに言った。

「……そう…ですよね!!」

「そうだよ！それに今は敵に見つからずに普通に動けるから逆に有利だし！」

「……そうですよね!!!じゃあいきましよう！今すぐいきましよう!!」

アルに背中を向けて目を服の袖でゴシゴシと擦って上で確認した敵の位置まで速足で歩く。アルは屈んだまま急ぎ足でついていったが速足で歩き、アルよりも身軽なハルについていくのがやっとだった。

第60話 フォーム

「ハル、こちら和秋。歩くの速いよ、アルと離れ過ぎ、ちょっと止まって。」

上から敵の位置を知らせていた和秋がハルの異変に気づき無線で呼びかけた

「あ、ごめん。」

無線を受けてやっと自分がアルを置き去りにしつつある事に気づき足を止め、アルが追いつくのを待った。

「ハル君、速い、危ない、疲れた、」

中腰で足場のよくない塹壕の中を急いで歩いたアルは少しあがった息で途切れ途切れに喋る。

「すみません。ちょっと…なんて言うか…すみません…」

「いいよいいよ。けどこれからは落ち着いてね」

バツが悪そうに言葉を濁すハルにアルが軽く笑いながら言った時、無線から和秋の声がながれた。

「ちょっと黙って！！目標接近！！1つ奥の塹壕に2人来た、もし次の角曲がったら接触するよ。急いで準備して！」

「マジか！？了解」

「了解」

通信を受けた2人は急いで曲がり角の出口に、左右にわかれて張り付き、アルは右股に付けたシースから刃渡り15cm程のコンバットナイフを抜き取り右手で逆手に、ハルは出発前に玄慈に渡された小太刀の様な刀を右手で握り、構えた。いつ来ても対応出来る体制を作って待っていたがなかなか敵が来ない、その代わりに、声が風に乗って流れて来た。

「…なあ新入り」

「んー？なんだ新入り」

「どうして見回りなんかしなくちゃなんないんだ？バカ野郎」

「そりやお前敵が来たらダメだからだろ、バカ野郎」

「……敵が来た事って今まであったのか？キッチンとシヨボく偽装してんのに」

「記録によるとない」

「なあ…どうして毎日見回りなんかしなくちゃなんないんだ？」

「そりやお前敵がいつ感づいて来るか分からないからだろ、地下の『ファーム』が見つかってみるよ、やべーだろ？」

「あー『ファーム』はやバいな、そっか…じゃあ結構重要な仕事なんだな」

「ああそうだ、分かったらしっかり見回って早く中帰って一服しよう。」

「そうだな」

立ち止まっでの会話が終わり、ようやく見回りを再開した2人の兵士風の男達が1本奥の塹壕に入るため曲がり角を曲がった。

第61話 デウス・エクス・マキナ

角を曲がった瞬間、兵士風の男達の、左側の男の首から血が噴き出した。声を出す暇もなく、驚いたような、理解できていないような、何とも形容し難い顔で崩れ落ちる仲間に声をかける事も叶わず、もう1人の男は口を抑えられ首にナイフを突きつけられた。

「大声を出さず俺の質問に答える。ファームってなんだ？」

誰が発したかも分からない声に戸惑い、地面に染み込みきらなかった血で自分のまわりに血溜りをつくりながら次第に色を失っていく仲間を目だけで見つめながら辟易している男の目の前に、仲間の命を刈り取った鋭利な日本刀が突きつけられた。鋭い切れ味のせい、血はそれほど付着していない。

「……お前達は誰

「もう一度言う、ファームってなんだ？」

少し緩められた手の隙間からかうじて出した声は冷たい、小さな声で遮られた。

「後5秒だけ待つ。」

「待つてくれ、俺は新米で何も知らないんだ!!」

男は小さな震えた声で自分が何も知らないと主張する。

「3…2…1…、」

男の言葉を見殺して進んだカウントダウン、数が少なくなるにつれて首に当てられたナイフが皮膚を押し、切っ先と接する部分から一筋の血が流れた。

恐怖心に支配された男は目を強く閉じて歯を食いしばった。

「0。」

カウントダウンが終わった、と同時に首からナイフが離れ男の太股を深々と突き刺した。

「があっ!?!」

「5、4、3……」

情報を聞き出すまで殺すわけにはいかない。しかし主導権を相手に渡すわけにはいかない。その為、アルがとった『最良』の選択。

「待て!待ってくれ!!話す、話すから止め　ぐッ!?!」

「声は小さく。じゃなかったか?新米テロリスト」

アルは

「話す」と言った男に深々と刺さったナイフの柄を掴んで左右に動かした。

「分かった、分かったから止めてくれ!!……地下では…『ファーム』では『デウス・エクス・マキナ』を育てている。俺が知っているのはそれだけだ!本当だ嘘じゃない!」

「ありがとうございます。ごめんなさい。次はきつと、幸せになっ

て下さい。ごめんなさい、さようなら。」

「…………え!？」

男が人生の最後に発した言葉は単語でも何でもない、自分の状況を理解しきれない男の喉から反射的に出たただの音だった。首から血を吹き出して倒れる男を、アルとハルはただ、見つめていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3616c/>

そして少年は引き金を引く。

2010年10月12日14時57分発行